
緋弾のアリア 落ちこぼれの最強拳士と魔弾の姫君

柳之助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア 落ちこぼれの最強拳士と魔弾の姫君

【Zコード】

Z5134Y

【作者名】

柳之助

【あらすじ】

「あー、レキといちやつきてー」

この物語は那須家きつての落ちこぼれである俺、那須蒼一が、嫁であり主人であるレキといちやつきながら、武偵をする話である。ついでに友人である遠山キンジを手助けしたり、しなかつたりする話でもある。

ついでに言えばいつの間にか世界レベルで戦っちゃう話ですらある。まあ、そんな話ではあるが、とりあえずレキの可愛いことを理解して

くればそれでいいよ。

応援支援感想頼むぜ？

そうしたら——なるべく派手な技を決めてやるからさ。

登場人物紹介

那須蒼一

年齢 16
職業 高校生
所属 無し
称号 『拳士最強』 『落ちこぼれ』
所有能力 気

身長 168cm
体重 73kg
武僧ランク E

髪色 黒
瞳色 蒼
性格 理不尽系クール
先祖 那須与一
趣味 アニメ ライトノベル マンガ エロゲー

必殺技一覧

・虚刀流

- 一の奥義 『鏡花水月』
- 二の奥義 『花鳥風月』
- 三の奥義 『百花繚乱』
- 四の奥義 『柳緑花紅』
- 五の奥義 『飛花落葉』
- 六の奥義 『錦上添花』

七の奥義『落花狼藉』
八の奥義『』
九の奥義『快刀乱花』
十の奥義『』
最終奥義『七花八裂』
最終奥義『七花八裂・改』
一の最終奥義『』

・『蒼の一撃シリーズ』

第一番

第二番

第三番

第四番

第五番

第六番

第七番

第八番

第九番

第十番

第十一番

第十二番

第十三番

終ノ番

第零番

N e w !

・走法　宙弾き

登場人物紹介（後書き）

隨時更新予定。

プロローグ 「あー、レキといなやつをひー」 b.y 那須蒼一（前書き）

ひとつあえず、短いプロローグ

プロローグ 「あー、レキといひやつてー」 b.y 那須蒼一

空から女の子が降つて来るなんてあるだらうか？
いや、ない。

そんな事がありえるのは知り合いの根暗ハーレム男だけであつた。
少なくとも俺、那須蒼一にはない。
これまでもなかつたし、これからもなにだらう。
この俺にあつたことは。

この那須家きつての落ちこぼれである俺にあつたことといえば。

半年前の十月。

知り合い以上、友達未満の女の子。
ライフルを突きつけられ。
求婚されたぐらいである。

目が覚めた。
季節は四月。
長袖にするか半袖にするか悩む季節だ。といつても本日より高校二年である俺には制服の長袖がほとんどなのだけれど。
ベッドから起き上がり、周りを見渡してみる。
男子寮の寝室。
一段ベッドで寝ているから、視点は高い。
ベッドの下段には我がルームメイトにして男の敵たる根暗ハーレム

男の遠山キンジが睡眠中だ。

相も変わらず暗そうな顔をしているが、あのゼロの使い魔かかの幻想殺しかといふほど美少女を惹きつける男である。

もはや、新手の誘惑成分を発しているとしても俺は驚かない。

キンジンとか。

いや、こいつは血筋できな理由があるからトオヤマンとかだろうか。

ピンポーン。

間の抜けた音が響く。

ああ、またこの根暗に誘われた美少女が一人。

時計を見れば現在七時。

下に降りてキンジを観察してみる。
起きる気配はなかった。

「ふむ」

とりあえずかかと落としをキメてみた。

「ぐほおーー？」

「おお、くの子」

腹からきれいなくの字に折れ曲がった。

「何だ！？ 敵襲か！？」

「いや、お客様なんだ」

跳ね起きて周囲を警戒するキンジ。
それに優しく声をかけてやる。

「ん、ああ。白雪か……。といひで蒼一

「ん?」

「なんか腹が誰かにかかと落としされたよつて痛むんだが……知ら
ないか?」

「知らん、といとと玄関行けよ」

「あ、ああ

寝間着のままで出て行くキンジ。
彼を見送り、ベランダに出て空を見上げる。
白い朝の行いを思い返して、

「うん」

一つ頷いて、

「いいことした朝は気分がいいなあ

今日もいい日になりそうだ。
あ、星伽の悲鳴が聞こえた。
キンジの寝間着にでも興奮したのだろうか。

しかし、しかしだ。

俺、那須蒼一の予想は外れることになる。

おおよそ全てのことに対しても非才の身だか勘も大したこと無かつたらしい。

この日より、俺はルームメイトとそのパートナーのせいで始め成り行き、途中からは自ら、世界レベルでの戦いの中に飛び込むことになるのであった。

「あー、レキといちやつきてー」

無論、今はまだ知らない。

プロローグ 「ねー、レキといつかつたれー」 b.y 那須蒼一（後書き）

感想待つてまーす。

……プロローグだけだけど。

今日もう一度更新したいとおもこします。

第1拳 「そんな、かわいいだなんて——何を今更な」 ボソレキ

「——」としたなあ、と思いつつ部屋に入り制服に着替えておく。部屋を出でてビングまでいけば。

「おこおこ、そつやあ確かに今日は始業式だけじゃれ」

机の上に広げられていたのは豪華絢爛な朝飯だった。デカい重箱に納められた色とりどりな食事の数々。お正月か。

「あ、おはよー。那須くん」

「ねー、ねまよーさん。星伽、どれ

あこやつわやんやー、重箱のおかずに手を伸ばすが、

「いやー」

「あいた」

キンジにはたかれた。

「なにすんだよ」

「せっかく白雪が作ってくれたんだから、ひやんと頂きますへりこ
言へく」

「へこへこ

不承不承で俺が頷いている横では、

「キ、キンちゃんが私のためにお、怒つて……はうはう」

星伽がトリップしていた。

まったく、キンジが絡まなければまともなのだが。

スタイル抜群の大和撫子で超能力捜査研究科《SSSR》の秘密兵器にして生徒会長、園芸部部長、女子バレー部部長、手芸部部長を兼任し、挙げ句の果てには平均偏差値四十五の武偵校において脅威の偏差値七十五を叩き出すハイスペック。

聞けば誰もが尊敬するような才媛たが、その正体は俺から言わせればただの色ボケだ。

もし仮に、彼女の脳内を調べて見れば占められているのは“愛しのキンちゃん”に間違いない。

欲望の怪物が生まれたら、絶対にキンジを拉致るか、周囲の女子を撲滅するだろう。

恐ろしや。

もつとも、欲望に忠実なのは人のこと言えないのだが。

それゆえに、食事前のあいさつもせずにおかずを摘もうとしたのは、御覧の通り星伽にいい思いをさせるためである。

決して俺の行儀が悪い訳ではない。

決してない。

とりあえず俺も座る。

三人で手を合わせて。

「いただきます」

「いただきます」

「いただきまく

「うれしかったまでした」

「うれしかったまでした」

「ねやまつねまでした」

三人で食後のミカンを頬張る。

ちなみに俺は自分で剥いたがキンジは星伽に剥いてもらっていた。

「こつもありがとな

「えつ。あ、キンちゃんもありがとな……ありがとな」

「なんでお前があるがとうなんだよ。ていうか三つ握つくな。土下座してみたいいだぞ」

「だって、キンちゃんが食べてくれて、お礼を言つてくれたから…

「…

……ミカンひめー。

とりあえず、星伽の下着が見えて興奮しているだろうキンジは放つておく。

七時四十五分。
武偵殺しやら女難の相やら話し続けている一人を置いて、男子寮を出る。

自転車を押して向かう先は女子寮だ。

今年から入ったであろう一年生は不審な目を向けるが、二年以上には慣れたものである。

入口には一人の少女。

ただの少女、ではない。

美少女である。

澄んだ翡翠の髪。

透き通った無機質ともみえる琥珀色の瞳。

抱きしめたくなるような矮躯。

アンバランスなヘッドホンですら少女の魅力の手助けとなつている。

背には長い棒状の袋を背負っている。

触れれば、壊れそうな儂い雰囲気を纏う少女。

彼女が。

彼女こそが。

俺、那須蒼一の主にして恋人。

本名不詳の美少女。

魔弾の姫君、レキである。

「おはよー」
「おはよう、蒼一さん」

「おー、おはよう。レキ」

ほんのわずかに。

それこそ俺にしか分からないくらいに笑った。

今日も相変わらずかわいいなあ。

思わずニヤける。

オマケに口に出していたらしい。

レキが反応して、

「そんな、かわいいだなんて——何を今更な」

なんか大分レキもエクストリームはいつてきたが大丈夫だろうか。

まあ、いいか。

かわいいし。

「失礼します」

レキが自転車の荷台な横向きに座る。

彼女の片腕か自分の腰に回つたのを確認して、

「じゃ、出すぜ」

そんな風に。

なんかこう純愛力ップル風に出発したのは良かつた。
途中で、バスに乗れなかつたらしいキンジに遭遇したのはまだ許せる。

そのせいで一人きりの時間がなくなつたのも許そう。

俺は、器の大きい男なのだから。

だが、だがしかし。

いくら何でも——

「その チヤリには 爆弾 が 仕掛け ありやがります」

などと、某ボーカロイドの齧られるなんて有り得ないだらう。

第1拳 「そんな、かわいいだなんて——何を今更な」 ピヨレキ（後書き）

なかなか話が進まない……

次回、戦闘シーンあります。

感想謝辞

チキン執事様、ブーモ様感想ありがとうございます。これからも頑張らせていただきます。

レキの髪色の描写修正。

12 / 4

第2拳 「なんでお前は自分と自分の嫁の」としか頭にないんだよー」 b よ遠

「ぬおおおおおー」

「をおおおおおー」

「」

後ろにはレキが、横にはキンジがいる。

グラウンドを走る。

自転車を漕ぐ。

だだ走つてゐるのではない。

爆走である。

何が悲しくて、四月始めから自転車で爆走しなければならぬいか
といつと。

俺とキンジの後ろ。

数メートル離れて俺達を追いかけてくるのは。

「な、なんでーー」

キンジか横で叫んだ。

「なんで朝から強襲科の校舎へんからいきなり現れたU.N.I装備
アサルトのセグウェイに追いかけられて、自転車に仕掛けられたら爆弾にビ
ビりながら学園島爆走しなきゃなんないんだーー！」

「ひむ。」

やたらに説明口調あつがとつ。

キンジが叫んだ通り、俺とレキにオマケ一で登校し。
俺とキンジ《・・・・》が所属する、強襲科の校舎でそれは現
れた。

セグウェイである。

だだのセグウェイじゃあなかつた。

UNI装備である。

ボイスは某ボーカロイドである。
一機同時である。

需要ねえよ。

「蒼一、なんとかならないか！？」

「なんとかって言われてもなあ……レキ？」

「難しいです」

レキは愛銃ドラグノフに手を遣り、

「今の状況では流石に一機同時落とすのは難しいですし、落としても増援が来ないとも限りませし」

「だよなあ……」

ちょっと考えてみる。

ふむ。

「キーンジ！ プランA出来たけど聞くか！？」

「聞かせろ！」

態度がデカい気がするか今は気にしない。
後で締めるが。

「まず、俺がレキを抱えて跳ぶ」

「それで？」

「自転車はこの際諦めて、一度キンジに引き付ける」

「それから？」

「キンジが何か新しい力に目覚めるのを期待して俺とレキは登校する

「目覚めるか——！」

やかましい。

そこか主人公属性でどうにかしな。

「なんでお前は自分と自分の嫁の事しか頭にないんだよ！」

「おいおい、なんてこと言うんだ。
そんなこと言われたら、

「照れるなあ」

「照れるなーー！」

「……案外余裕ですね、一人共」

と、まあ。

案外余裕を持っていた俺たちだが。

いい加減どうにかしたいなあ、と思いついた頃だった。

「ん？」

先に気づいたのはキンジだった。

視線の先はとある女子寮の屋上。

いたのは一人の少女だった。

武蔵校のセーラー服にピンクのツインテールの小柄な少女。

何か背負っているようだが、よく見えなかつた。
とりあえず視力をあげてみた《…………》。
確認すれば、

「……パラグライダー？」

「そのようですね……まさか」

素でも両目の視力6・0を誇るどんでも視力の、レキも確認した
らしい。

そのレキの僅かに驚いた声と同時に。

「はあ！？」

飛んだ。

キンジの間抜け声が響く。

空中にてパラグライダーを展開。

そのままこすらに飛んでくる。

「バ、バカ！　この自転車には爆弾が……」

今更遅い。

だが、キンジの叫びももつとだ。

こつちには自転車付き爆弾と、UNI装備の誰得セグウェイがあ
る。

そんなのに突っ込むのは自殺行為だ。
ある程度の実力が伴わないかぎり。
しかし。

彼女は相応の実力の持ち主だったらしい。
両太腿のホルスターから銃を抜く。

黒と銀のガバメントによる二十一拳銃。

それらを構え、

「ほり、そこのバカともー もうもと頭を下げなさいよー。」

ぱんぱんぱんぱん。

四発が四発ともセグウェイのタイヤに命中する。
後ろに転がつていった。

それは実に歓迎すべきことだが、

「異議あーり！ バカはそこの根暗だけで……うおーー。」

「そんなのに引っかかってる時点で十分バカよー。」

おっしゃる通りで。

それはともかくかなりの腕前だ。

パラグライダー装備での精密射撃などそういうべきはしない。
少なくとも俺にはまず無理だ。

銃火器の類は苦手である。

謎の飛行少女は俺とキンジを交互に見るが。

「バカじゃないこと証明してやるからあいつのバカを頼む」

判断は一瞬。

少女は意識をキンジに向ける。

その上で姿勢を変える。

頭を下に、持ち手に足を引っ掛けた。

そのままキンジをかつたらいつのだらう。

向こうはもうここと判断。
俺達も逃げるところ。

「レキ」

「はい」

「飛んでくれ」

「——はい」

飛んだ。荷台から後ろへ。

なんの迷いもなく。

なんの躊躇いもなく。

なんの疑いもなく。

跳んだ。

車体が重さを無くす。

かなりのスピードで走っていたため、地面落ちたら最悪死ぬ。
がしかし。

この俺がそんなことをさせる訳がない。

かつて実家とのいざこざがあり人間不信の人間嫌いだったがとする吸血鬼もどきのように美少女だけは例外だと謳つてきたこの俺に限つては有り得ない。

「コンマ数秒の差をもって俺自身も跳んだ。
ただ跳んだだけではない。

「おつやー。」

思い切り蹴飛ばした。

自転車がひしゃげぶつ飛ぶが、確認せずに後ろを向く。

着地。

特殊合金を仕込んだ靴底から火花が散つたが気にしない。
スライディング気味に飛び込んで。

「お待たせ、ハニー」

「お気になさらず、ダーリン」

受け止めた。

お姫様抱っこである。
キンジに視線を移せば、

「ふぼつ！」

謎の飛行少女の胸に頭を突っ込んでいた。

ドカーン。

自転車が爆発した。

そんな感じで。

美少女をお姫様抱っこして。
美少女の胸に頭突っ込んで。
俺達はセグウェイから逃れた。

「しつこいなあ」

セグウェイから逃れたはずだった。

しかし、

「これ、倒しても倒しても出てくる無限ループじゃないよな

「さすがないと思っていますけど」

先ほどレキが予想したように。

お姫様抱っこでセグウェイから逃れた俺達に。
やつぱり工装備のセグウェイが来た。

今度は7台。

俺達2人を半円で囲つようになに来た。

「やれやれ、しつこい奴は嫌われるつて相場がきまつてるぜ？」

「私はしつこくても蒼一さんが好きですよ

「当然俺もだ」

さてと。

構える。

足は大きく開き、腰を深く落として

左足を前に出して爪先を正面に向けて。

右足は後ろに引いて爪先は右に開き。

右手を上に平手で左手を下にして、手は平手。

相手に壁を作るような構え。

とある無刀の剣法の一の構え。

「来いよ、最強の拳を教えてやろ！」

拳士最強、那須蒼一推して参る。

気。

およそあらゆるバトル漫画に登場する代表的な異能である。

生命力を戦闘力に変えるスキル。

気力を実力に変えるスキルである。

視力を強化して遠くを見たり。

脚力を強化して自転車を蹴り飛ばしたり。
俺は。

那須蒼一はそれが使える。

那須蒼一の唯一にして絶対のスキルだ。

それは俺が。

ありとあらゆる才能から見放されたこの俺が。

那須家の落ちこぼれである俺が。

才能に見放され、落ちこぼれであるがゆえに得たスキルである。
それをもつて俺は、自らを最強の拳士だと名乗るのだ。

「氣を使えると何が良いっていえば、漫畫や小説の技が大体使える
つてことだ」

虚刀流。

虚しき刀の流れ。

とある刀集めの物語に出てくる最強の剣法。

刀を使わない剣法。

現在、俺のお気に入りの流派。

咳きながら、セグウェイとの距離をゼロにした。

ただ近づいたのではない。

氣を宿した脚で地面を蹴り、そのまま前蹴りである。
その時間は僅か0・5秒。

「虚刀流、『薔薇』——！」

一機破壊。

さらに隣の一機掛けて、独楽の如き後ろ回し蹴り。

「虚刀流、『牡丹』——！」

三機破壊。

右端の奴に近づき、氣を宿した鋼の如き貫手を繰り出す。

「虚刀流、『蒲公英』——！」

セグウェイの車体に突き刺さり、そのまま左端のにぶん投げる。

激突、破壊。

五機破壊。

其処にしてようやく他のセグウェイが動いた。

残りの一機がこちらを向き、

ぱぱぱぱぱばん。
ぱぱぱぱぱばん。

連続で発砲した。
がしかし。
着弾点に俺はもういない。

セグウェイがこちらを向いたと同時に跳躍。
そのまま脚を足刀に見立てた、前方三回転のかかと落とし——！

「虚刀流七の奥義、『落花狼藉』——！」

一機がまるでプレスされたように縦にひしゃげた。

六機破壊。

続いて最後の一機を狙おうとして、

ぱあ——ん。

最後の一機が吹き飛ばされ、大破する。

見ればレキが立ち膝でライフルを構えていた。

全機破壊。

戦闘終了。

「ふう」

予期せぬ無駄な戦闘に溜め息一つ。

「サンキュー、レキ」

「いえ、夫を支えるのも妻の役目ですので」

おおわ。

そんなこと言われたらテンション上がりちゃうぜー。
どうしよう。

どのようにしてこのハイテンションを表現しようか。

「蒼一さん」

レキがこちらに来た。

おお、ここには抱擁からのキスだろうか、いやしかし朝からグラン
ドの真ん中でそれはどうなのだろうか、まあいいか。いや、ほら頑
張ったしね俺。だからこじる優美が必要であつて、それがたまたまレキ
とのハグアンドキスなだけで別にそんなにしたいわけじゃないから。
だって別にこんなタイミングじゃなくてもできるし、いや本当いう
仕方ないっていうかでもレキが、してくれるのなら受け取らないと
悪いし。だから、まあいいか。
うん。

心のなかで、言い訳を展開し廻くし、

「さあ、カモンハーハー！」

両腕を広げて待ちかまえる。

「はあ」

別にそれはいいですけど。

「遠山さんたちのこと、おれでません?」

「…………あ」

体躯倉庫。

ちょっととした戦場になつたいたそこを俺達は一人して覗いていた。
もつともキンジも謎の飛行少女ももついないのだが。
事の一端始終を覗いていて、

「なあ、レキ」

「はい」

「友人が性犯罪に走った場合どうすればいいのだろうか」

「笑えばいいんじゃないですか?」

「そうか。」

「はははは」

……笑えねえよ。

そんな安いネタでもねえし。
セグウェイどもはこちらにも来ていたがすでに破壊されていた。
問題はそれを破壊したのがキンジだということだ。
素のキンジにはできないだろうから、つまりなった《・・・》の
だろう。

問題は、

「状況的にさつきの飛行少女だろ……どう見ても中学生か下手した
ら小学生だぞ」

「あれだけ周りに女性がいるのに何もなかつたのはーーなるほどい、
少女趣味だつたんですね」

「だな……」

「これは一武僧として捕まえなければならないだろうか。 でも部
屋が広くなつてラッキーかも。 それに一人暮らし。」

魅力的な単語。

まあ、飯が問題だけど……待てよ。

「キンジがないと星伽が来ない……あの飯が食えなくなるのはな
あ」

それは惜しい。

仕方ないので見逃してやる。ひ
齧しのネタ程度で許してやる。

俺って優しい。

腕の裾を惹かれた。

「蒼一さん、料理なら私もできますよ」

「……言つておぐが、この前のカロリーメイトの盛つ合せは料理
じゃないぞ」

「もちろんです——ソースの和え物なんてどうでしょ？ つか

「それも料理じゃねえよ」

栄養食品から離れる。

第2章 「なんでお前は自分と自分の嫁の『』としか頭にないんだよー」 b y 遠山

主人公紹介とかやつたほうがいいでしょうか。
見たい人は言ってください。

感想頂けるとテンションあがります。

もしよかつたら一言でもお願ひします。

11／27修正しました。

第3拳 「……風穴開けるわよー」 b y 神崎・H・アリア

「武偵殺し?」

結局俺たち三人は始業式に出れず教務科に朝の爆弾騒ぎを報告し終え、教室へと向かっていた。

「……の模倣犯だよ」

ものす」げんなりしたキンジは言った。
背負つている空気が暗い。

「確かに先日逮捕されたと報道がありましたね」

「やついえば、朝お前と星伽が話してたな……」

「ああ……」

かなり元気ない。

理由はまあ、解つているが。

「ん? 口、どうしたんだ? り、さつきから、口、元気が、ン
無いぜ? が

「何やら不愉快な副音声が聞こえるんだが……! ?」

「ダメですよ、蒼一さん。遠山さんは今大変なんですからーー己の
隠された性癖に気づいて」

「 IJの外道夫婦が……。」

また、夫婦だなんて。
照れるなあ。

「いいか？俺のは体质だし、大体あいつは高っだった！」

「でも見た田小学生相手になつたんだろ？口コ「コンジやねえか」

「それに興奮したことをそんな威張られても、変態ですね」

「 IJの……。」

廊下にキンジの声が木靈する。

「どーせ、もう会つ」となんかないだろうからいい加減止めろー。」

・・・・・・・・

「先生、あたしはあいつの隣に座りたい」

「フラグだつたーー？」

2—A教室が一気にざわめいた。
一瞬の後に、

「つおーー！ またキンジか！」

「さすが特級フラグ建築士！」

「くそ、俺星伽さんに賭けてたのに！ 良妻系幼なじみが負けたと
！？」

「俺は戦妹アミカの風魔にかけたんだけどなあ！ 教え子忍者なんていない
ぜ！？」

「理子は色物過ぎたか！？ ポスロリ巨乳でいいじゃん！」

「俺なんか大穴狙いで通信科コネクタの中知空で賭けてたんだけどなあ！
武慎高が誇る前髪枠が！」

「くそ、ピンクツインテロリの転校生だなんて胸元の一人勝ちじゃ
ねえかー。」

「まてまてまで、何の話をしてるー といつか胸元って誰だよ
！？」

皆が一斉に俺の方を指で指した。

その指は俺を貫通し後ろの席にいたレキを指している。

「おいおこ、お前ら――人の嫁疑うつなよ」

「お前だ――――！」

やかましい。

件の少女——神崎・H・アリアーはやかましい連中を無視して、キンジの前まで来て、

「キンジ、これ。さつきのベルト」

一瞬で静かになった。

思うことは一つだ。

え、もうそこまでいったの？

……まあ、実際はそんな話じやないんだが。

面白いので言わない。

「理子分かった！ 分かっちゃた―――これフラグばっさきにたつてるよ！」

叫んだのはキンジに左隣の金髪ゴスロリ女、峰理子だ。
キンジ曰わく、インクスター探偵科ナンバーワンのバカ女。

俺曰わく、キンジハーレムの一員。

「キーくん、ベルトしてない！ そしてそのベルトをツインテールさんが持つてた！ これ謎でしょ！？ これ謎でしょ！？ でも理子には推理できた！ できちやつた！」

「ひるせえ。

謎の踊りを披露しながら叫ぶ。

「キーくんは彼女の前でベルトを取るような何らかの行為をした！
そして彼女の部屋にベルトを忘れてきた！ つまり2人は——熱
い熱い、恋愛の真っ最中何だよ！」

セクハラが始まつた恋愛はありなのだろうか？

周囲は理子の推理に聞き入つてゐる。

キンジは何言つてんだこいつ、といつ顔をしている。
やつぱり面白いので放つておぐ。

「ソーくんに負けないくらいのー！」

「誰に負けないとお、キンジーー？」

「俺かー？」

「いいぜ、見せつけてやろうじやねえか！ レキ！」

「いいでしょ」

ノリノリだー？、と皆が叫んだ瞬間。

すぎゅぎゅん！

一発の銃声がクラスを凍りつかせた。
音の下は、顔を真っ赤にした神崎。

「れ、恋愛なんて……くだらない！」

翼のように広げた両腕の先、左右の壁には穴が一つずつ。

理子は謎の踊りの姿勢のまま席に着き、レキはヘッドホンの音量を上げて田を閉じて着席。いや、それは逆に危ない。

「全員覚えてきなさい！ そういうバカなこと言ひつ奴には……」

それが神崎・H・アリアの武慎高に発した第一声。

「——風穴開けるわよー。」

……決めゼリフかつけえなあ。

第3拳「……風穴開けるわよー」 by 神崎・H・アリア（後書き）

嫁レキが何気に入気（笑）。

携帯で書いていると、長文が書きにくいので基本このくらいな長さでやつていきます。

第4拳 「IのーーDXカツ丼定食780円をー」 b y 風魔陽菜

「し、師匠、本氣で「やれぬか?」

「ああ。構わん」

焦つたような声を出すのは諜報科の一年、風魔陽菜。
それに答えたのは彼女と戦妹契約を結んだ強襲科一年、遠山キンジ。

「で、ですが、師匠! 某には……!」

「お前への正當な報酬なんだ。気にするな」

「し、師匠……」

風魔は感極まつたように笑顔を浮かべ、しかし戒めるように首を振り、

「ですが、この身は未だ修行中の身ゆえやはり受け入れられないでござる!」

「まつたく……」

キンジは呆れたよつて首を振り、

「分かつた。お前が受け取らなければ、これは棄てる」

「…………師匠…………そこまで某の事を…………」

そして、風魔は意を決し、

「了解ござる。」の不肖風魔陽菜、師匠のお気持ち取扱いせりて頂くでござる。そして、そして… 噛み締めさせて頂くござる、師匠の一番弟子と成れた事と師匠から承る」の…」

風魔はもはや涙すら流し、

「この一一〇×カツ丼定食／八十円を…」

皿の前の丼を食らいに行つた。

「ああ、よく味わえ」

キンジはしみじみ呟つた。

「……」

「……」

なにこの茶番。

・・・・・・・・

「神崎・H・アリア、強襲科所属でランクはSランクに昇る。Hアサルトモグ」

「Sランク……、レキと一緒にか」

「ついでに言えば一年前のお前とも一緒にだ」

「私は現在進行系でSランクですが」

昼夜休み、学食にて。俺、レキ、キンジ、風魔はいた。

キンジの頼みで神崎について調査をした風魔の報告を聞くためだ。

俺は中華定食。

レキはカレー。

キンジは和風定食をそれぞれ注文していた、

「某が知る限りでは使用武器は二刀と二丁拳銃。また、バーリ・トウードの達人、ロンドンで活躍していたらしいにござる。ハグハグ」

「ああ、それは実際朝味わつた」

「活躍つて、どんなもんかわかるか?」

「さすがに時間が無かつたので、そこまでは……。噂では失敗したことがないとか……」

「それはそれは……」

口元が歪む。

天才、といつやつか。

大違ひだ。

実家において失敗続きだつた俺とは。

そして、天才といえば——。

「蒼一さん」

「ん」

「せうじつ蒼一さんはカッ『よくないですよ』

「そりや失敬」

やれやれ。

嫁には頭があがらんよ。

「……それで？　他に知つている」とはあるか？」

「あ、後は……一つ名が『カドラ双剣双銃のアリア』といつ」とくらいいし
か分からぬいで」ゼる」

「『双剣双銃』、か……」

キンジは呟き、

「ありがとな、風魔。また、何かあつたら頼む」

「御意。で某はこれで。」おわづけまことにゼつました

いつの間にかカツ丼を平らげていた風魔がは一度、懷から煙玉ら

しきものを取り出し、

「……」

周り、即ち昼食中の他の生徒を見て。
しまつて、普通に小走りで帰つてた。

「……さすがにこんなところで煙草は使わなかつたか」

「お前、自分の戦妹アミカのことばつてたんだよ」

「それにしても……若干情報が少ないよつて思えますが」

「分かつてる。後で理子にも調査を依頼するつもりだ」

「峰か、まあ悪くない人選だ」

あのおもしろい女はスペックは高いからなあ。
変人だけど。

「きつと向こうも」

レキか、ポジコと言つた。

「きっと向こうもキンジさんや蒼一さんのことと調べてゐんでしょうね」

「だらうつな……」

「まつたく酔狂な奴だな、おい

レキはともかく、

「Eランクの俺たちの事を何を調べるんだか」

・・・・・

「…………どうしたこと?」

神崎・H・アリアは戸惑っていた。

朝の三人について軽く聞き込みをした事についてだ。

遠山キンジが一年にしてEランクだったにも関わらず、今年はEランクになっていることではない。

レキが本名不肖出身地不明にして、自らと同じEランクの武僧であることにではない。

那須蒼一。

こいつだ。

那須蒼一が拳士最強を名乗っていることだ。

何故ならば自分が知る拳士最強は——彼ではない。

「あの噂……ホントだったてこと?」

自分が武偵高に転校する少し前のこと。

アリアの知る拳士最強——握拳烈じきけんれつが。

この極東の地にてとある武偵高の生徒と戦い、命を落としたとい

う——あの噂は。

真実だったということか。

第4拳 「この一一DXカツ丼定食780円を!」 by 風魔陽菜（後書き）

冒頭で真面目な話だと勘違いした人は何人いるかな？

この作品、メイン投稿の『流転の悪役』よりお気に入り登録や、評価ポイントの伸びが良くて少し複雑。

終わク口や、恋姫が、好きな人は読んでみてください。

11/29風魔の口調修正

第5卷「やの原にはお風呂の風穴がない」といふ事 b y 那須蒼一（前書き）

たゞひとつコアス回。

第5章 「 やの原にはお前だけ風穴がないんだよ 」 b y 那須蒼一

「 キンジ、あんたあたしの奴隸になりなやー。」

「」

「」

「」

自分の部屋に帰つて、リビングの扉を開けたらルームメイトが特殊なプレイに誘われていた。

ビハーン。

・・・・・・・・・・

ひとまず、窓をかけのコビングのドアを閉め、
レキと顔を見合わせ、

「 おじおじおいおい、キンジの奴授業終わってソッコー帰ったと思つたら何してんだよ」

「キンジさん、そこまで特殊な性癖があつたんですね
やはり」

「口コロソニアマテカ」と書かれていた。

バーン、という音と共にドアが蹴り開けられた。

「そこはせめてまわかとでも言えよ、この外道ども……。」

息を荒くしたキンジだ。

レキも俺の後ろに隠れる。

「おこおこ、興奮すんなよ」

「わざー、怖いですー」

「お前ら……！」

—キンジ、飲み物くらい出しなさいよ!」

リビングの中から神崎の声。

「コーヒー！ エスプレッソ・ルンゴ・ドツピオ！」 砂糖はカンナ

呪文かよ。

もせやキンジは、もうこやだにこつひとこつ顔をしてゴボングにて

戻つていいく。

……淹れるんかい。

もくもくと湯気を上げるインスタントティー。ソファに座った神崎はそれを物珍しそうに眺め、

「これホントにバー？」「

ぱじゃねりしちつた。

それ以外のコ-ヒーなんてしらない。

「……へんな味、ギリシャローリーによく似てる。」
でもひとつ違つ……。

「シシブシ」とつぶやきながら「一ヒー」を飲んでしる。

「ギリシャコーヒーって、どこのメーカーだ？」

「普通にギリシャ産ついでじやないですか？」

ぬぬ、なるほど。

「味もメーカーも産地もどうでもいい、それよりもだ」

キンジも「一ヒー片手にソファに座り、

「今朝助けてくれた」とには感謝してる。それにその……お前を怒らすような事を言つてしまつたことは謝る」

軽くキンジが頭を下げた。

……いつの間にかシリアスに。

「でもだからってなんでここに押しかけてくる?」

「分んないの?」

「分るかよ」

神崎は少し意外そうな顔をし、

「あんたならとっくの昔に分つてると思つたのに。まあ、いいわそのつけ思つて当たるでしょ」

神崎が肘かけにもたれる。

「おなかすいた、なんかないの?」

あ、今キンジがドキッとした。

「ね、ねーよ」

「ないわけないでしょ、あんたたち普段何食べてんのよ」

神崎の視線がこちらに向いた。

「カロリーメイトです」

「実は霞が主食なんだよ」

「……こつも下のコンビニだ」

スルーしゃがった。

「じゃあ行きましょう。あ、そうだ」

神崎はソファから立ち上がり、キンジの顔を覗き込み、
「セレッテ『松本屋』のももまんつである？ あたし食べたいな」と、キンジを赤くさせている横で。

「……私たち若干空氣なよつな」

レキが小さく呟いたのを聞き逃さなかつた。
言ひなよ。

・・・・・・・・・・

「握拳裂つて知つてゐる?」

それはキンジが神崎の命令によりコンペニーに派出され、出て行つて突然聞かれた問いだった。

突然の問い合わせに対し、

「俺の師匠だ」

間髪いれず答えた。

「

ふう、俺はため息をついた。

隣で僅かにレキが身を固くしたが、それには構わぬ、

「つーか、自己紹介まだだつたよな。那須蒼一だ」

「……レキです」

「神崎・H・アリアよ……それよりも、師匠?」

「ああ、10歳の時から15歳までだつたけどな。それがどうかしたか?」

神崎は眉を細めて、

「……あんた、拳士最強とか名乗つてゐるじいわね」

「ああ、さむらと前任者から襲名したぜ」

「なら、握拳裂からあんたは拳士最強を引き継いだつてこと……？」

「そうだけど、それがどうかしたのか？」

「……私はロンドンで拳士最強は握拳裂つていう日本人って聞いた。でもこの武慎高に来てからはそれはあんたで、ついでに気になる噂もロンドンで聞いたわ」

「へえ、どんな」

レキは何も言わず目を伏している。

「…………日本で握拳裂は武慎高の生徒と戦つて死んだ』。つまりこれって……」

「ああ、そうだ」

俺は一度区切り、無表情で言った。

「握拳裂は俺が殺した」

「――」

神崎の目が見開かれる。

レキは無言で俺のシャツの裾を握った。

……かわいいな。

「勿論、簡単に殺したわけじゃないぜ」

そういうつて俺はネクタイを緩めた。

シャツのボタンを外し、下シャツも脱ぐ。

神崎は一瞬顔を赤くしたが下シャツの下にあつたモノを見て、またも目を見開いた。

黒髪に蒼みが掛つた目、顔つきもそれなりな俺の見た目。引き締まつた筋肉質の身体にそれはあつた。

傷跡だ。

左肩から腰まである縦の傷跡。

それに交叉する、左の脇腹から右肩に走る斜めの傷跡。心臓のあたりを中心とした十字の傷跡だ。

「ほかの痕は消せたけど、コイツは深すぎて消せなかつた。まあ、一生残るわな」

そして、もちろんそれだけではない。

レキも今は無言で隣にいるだけだが、彼女自身も胸の中央に何かが刺さつたような傷跡がある。

無論、それは俺は言わない。

「ついでに言えば、俺が今Eランクなのもそのせいだ」

「

「武偵憲章第九条、それも守れないような奴はEがお似合いだよな」

もつとも、それ以前から俺のランクはCランクだったのだが。

「なあ、神崎」

言葉を失つた神崎に俺は声を掛ける。

「俺はお前がどうにうつもり《…………》か大体分かる」

「！」

音を立て勢いよく立ちあがつた。

「ああ、勘違いすんなよ、お前の素姓とかは知らん。でも何のため
にキンジに近付いたかは分る」

「…………あたしには、時間が、ない、のよ」

絞り出したような声だった。

まるで何かわるいことをして、しかしそれを認められないような
声だった。

「そりが、別に俺は何も言わない」

実を言えば半年以上前、レキに惚れる前の俺も似たようなモノだ
つた。

戦う意味を探していた頃。
戦い覚悟を求めていた頃。

「きっと、お前の探してるのはキンジだらうね」

自らの主を探していた俺。

神崎も自分にとつてのナニカをむがしているのだろう。
そのナニカは大体予想はつく。

だが。

「だが、もしもお前の都合でキンジを傷つけてみる」

「」

朝、彼女自身が言つた決め台詞をそのまま返すよつこ、

「 その頃にはお前に風穴が空いてるぜ」

言つた。

「……あんた、やけにアイツのことを庇うのね」

「ああ？ 当然だろ」

俺は誇らしげに胸を張る。
なぜならアイツは。

「俺の親友だ」

もつとも、本人の前では絶対言わないが。
あ、帰ってきた。

第5拳「その頃にはお前に風穴が空いてるぜ」 b y 那須蒼一（後書き）

嫁レキ空気回。

ちょっと語られた蒼一の過去。

これでも30パーセントくらい。

まだまだいろいろあります。

早く過去編をやりたいなあ。

魔剣編より先にやつちやおうかなあ。

宣伝

龍之介の活動報告のPV予告バトンに刀語×戯言、人間シリーズの
予告あります。

できればコメントとかください。
感想も期待させていただきます。

第6拳 「 フラグですねえ 」 ピンキ

アサルト
強襲科でパー・ティーを組む。

それが神崎・H・アリアが遠山キンジへの依頼だった。
以下、その時の二人の会話。

「キンジ、あんたあたしとパー・ティー組みなさい」

「……まさかそれ言つたために来たのか?」

「ええ、何か文句あるの?」

「いや、それなら学校で十分だろ」

「…………」

「…………」

「…………」

「……別に。それにはいきなり言われてもいいま

「風穴」

「は?」

「受けなきや、風穴」

「いやだから

「

「風穴二連」

「 」

「風穴五
」

「よろしくな、アリアア！」

以上である。

暴君かつ。

まあ、それはともかく。

こうして、遠山キンジと神崎・H・アリアのパーティーは誕生した。

・・・・・

強襲科アサルト

通称、『明日なき学科』。

奇人変人変態外道のバーゲンセールの如き武慎高においても命の危険性においてはダントツのトップ。

生存率、97.1%。

100人に3人は卒業出来ずに命を落すことになるまさしく死

と隣合わせの場所だ。

武偵、即ち武装探偵で真っ先に思い浮かばれるスタイルだ。

故に4ヶ月前。

武偵高の学園島とそれに隣接する空き地島が。

そのどちらもが、とある戦闘の余波により半壊した時も。優先的に修復された校舎のひとつである。

最も4月現在では、完全に学園島も空き地島も修復されているのである。

だが。

そんなじはともかく

閑話休題。

基本的には強襲科^{アサルト}の任務は荒事ばかりである。

・・・・・

「キンジ、そっち行つたぞー!」

「応!」

俺は街の路地裏をキンジと共に這いついていた。

「ぐ、来るなあー!」

帽子を田深にかぶつた男。
そいつを追跡中だつた。

「来るなと言われて来ない馬鹿がいるかあ——。」

「俺は悪いことはしてない！　ただ、愛に生きているだけだ！　そ
う、即ち愛の戦士！」

入り組んだ路地裏を迷いなく男は走つていいく。

速えな、おい。
ギャグ補正か！

「なにが愛の戦士だ！　そういうのを世間一般様ではなあ、こりこ
うだよ！」

俺とキンジが、追つている男。
そいつに指差し、

「この、ストーカー——！」

「違う！　愛の戦士だ！」

違わねえよ。

アサルト
強襲科に持ち込まれた任務で、数多い一つ。

ストーカー対策である。

まあ、対策というのは方便で実際は退治である。
中には示談で済ませる武僧もいるのだが、俺の場合。

「面倒だから、とりあえずぶん殴るー。」

「ぶつちやけすがだ、馬鹿！」

もう言こつゝ、キンジも殴るべせ。

・・・・・

神崎・H・アリアは見下ろしていた。
街を、ではない。

街を走っている遠山キンジである。
ビルの屋上の端に腕を組みながら、昨日パーティーを組んだばかりの男を見下ろしていた。

ストーカーを居っているキンジを見て思つことは、

「なんか違うわねえ」

先日、自分に見せてくれた。
魅せつけられたあの時の彼とは違う。

「キンジさんにもこうあるとこつ」とですよ

レキだ。

自分の横、同じビルの端で腰掛けている。
視線の先は恐らく、那須蒼一だらう。

それはともかく。

「あんたはそれを知ってるわけ?」

「ええ、まあ。成り行きでですが」

いろいろねえ。

誰にでも事情があるのは当然か。

那須蒼一も。

レキも。

遠山キンジ。

そしてもちろん、自分だって。

「それと、アリアさん。一つ言つておきたいことがあります」

「なによ」

「気をつけてくださいね」

「な、なによ」

「惚れなによつに」

「は、はあ?」

「ヤンジセニア」ですね

惚れないよ。アヒ。

気をつけてください。

「い、言つたでしょ。あたしはアヒコアヒコ……」

顔を林檎の「」とく赤く染めながら反論するが。

レキはそれを横目で見て。

やれやれ。

「 フラグですねえ」

第6拳 「 フラグですねえ 」 bソレキ（後書き）

あんまり中身がなかつたかなあ。

先日、ひさびさに感想が来たのでヒヤツハー投稿しちゃいました。

しかし、未だに主人公の決め台詞が決まらなくてどうしようかなあ？

感想期待してまーす。

第7拳 「お前ひつかでみてたるーー」 b y 遠山キャンジ（前書き）

余りの短さに投稿直後に加筆。

第7拳 「お前ひつかみてたるーー」 b.y 遠山キンジ

「ちゅうど、ゼンジ行くのよー キンジー」

「ゼンじだつていいだるー つこて来んなー」

「言わなこと風穴ーー！」

「ゲーセンだよー」

「あたしも連れできなさじよ、そいこー」

「なんでだよー！」

放課後、叫び合しながら走つていくキンジと神崎を見た。
仲良いな。

・・・・・

二人がパーティー組んでから数日しか経っていないが随分仲良くなつているようだ。

「やつぱり、ああいうシンボルの類は落ちるのが早い」

「世界中のシンボルに十下座してくださー」

レキがシンボルの擁護に回ってしまった。

「いや、別にシンボルが嫌いなわけじゃないぜ？」

「そ、そんなことを言つて蒼一さんのためにやつてるんじゃないです
からねつ」

シンボルだ……。

しかし、完全無表情なので迫力がない。

「蒼一さんキンジさんやアリアさんじばっかり構つてると全身の骨
砕いて標本にしますよ?」

ヤンボルだ……。

無表情なのでかなり怖い。

「私はただ蒼一さんが構つてくれないのが寂しいだけです」

クーボルだ……。

ていうか素だろ。

「悪い悪い、なんか放つておけなくてなあ

「なんだかんだでお人好しちゃうね」

「欲望に忠実なだけだぜ?」

「いいんですよ、それで。
と、レキは言つ。

「それで」「そ、蒼一さんです」

ほんの少しだけ微笑んだ。

・・・・・

寮の部屋に帰る。

基本的にレキは夜遅くまで「」について夜遅くなつたら女子寮に戻つてゐる。

する事は基本、アニメ鑑賞。
今日見たのは、

「……私もバカ^{スナイパー}ン狙撃手と言われたいのです」

「」の一言で理解できるだらう。

ていうか止めてくれ。

そして、キンジが帰ってきて、やたら疲れていたので。

「どうしたんだよ、キンジ。 まるで——」

「いや、別に——」

「まるでゲームセンターを知らなかつた神崎を連れて行つたら神崎がクレーンゲームのストラップのレオポンを取るうとムキになつてしまつて見かねて取つてやつたら一個取れちゃつて思わずハイタッチしちゃつてどっちが先に携帯に付けるか競争までして予想以上に嬉しがつてる姿にときめいちゃつたみたいじゃないか」

「お前どつかで見てたろーー！」

「知るかー！」

乱闘になつた。

何故だ。

携帯についていたストラップを地味に狙つてやつたりせりにキレた。

その時レキは、

「今季のアーチソンは豊作ですね……ヘッドホンに入れておかないと

自由すぎだろお前。

・・・・・

俺とキンジの乱闘とレキのヘッドホンに曲を入れ終わり。
夕食時。

「アリアがリアル貴族だった」

なん、だと……！

レキも目を見開いている。

「玉の輿狙いか……！」

「なんと 最低な発想ですね、キンジさん」

「最低なのはお前らだ……！」

レキを下がらせて再び乱闘。

五分後。

お互いの顔を腫らして椅子に座り直した。

「それで？ 他に新しく分かつたことは

「14歳からロンドンの武偵団に所属、ヨーロッパで活躍してたんだが 驚くなよ?」

「誰が驚くか、さつやと聞け」

「狙った犯罪者を逃がした事はない、99回一発逮捕

「なに?」

「尋常じゃなくほど驚いてますね」

いや、驚くなとこつのが無理だ。それよりも、

「それ、ホントか……?」

「ああ、理子からの情報だからな。間違いないだろ」

んん?

神崎がキンジに求めてることは何となく分かる。分かるからこそその業績は予想外だった。

武偵としてそこまでの能力がありながら、どうしてキンジを求める??

そこまでの能力があるなら必要ないだらつ。

「あと、実家とはあまり仲が良くないらしい」

「その貴族のお家ですか?」

「ああ」

ふうん。

そいらへんに理由があるといつことか?

「おいおい……困ったなあ」

家族関係で問題あるとか。

放つておけねえじゃねえか。

家族は大事にというのが、俺のモットーだ。

最も、今はレキとキンジ以外の家族なんて一人しかいないんだが。
まあ、だからこそキンジには一つ忠告しておこう。

「キンジ」

「なんだよ」

「玉の輿狙いはいいが　ロココンの罵りは覚悟しつけよ」

三度目の乱闘が始まった。

第7拳 「お前どつかでみてたるーー」 b.y遠山キンジ（後書き）

相変わらず嫁レキが大人気。

嬉しい限りです。

ついでに巡クロから落ち拳に来た人や落ち拳から巡クロに行く人が
いて嬉しいです。

そして、遂に主人公の決め台詞が決定！

意見を出してくれた方々ありがとうございます！

決め台詞発表はもう少しお待ちください。

次回はバスジャック。

早く戦わせたい。

感想、期待します。

当作品は感想の来れば来るほど更新速度が上がりますので（笑）。

明日は……どうしようか。

第8拳「ま、 ランクが三人に拳士最強がいるなら十分ね」 by 神崎・H・アリ

この話を読む前に、前話の加筆分を見てない方は見てね。

少し増やしました。

前回かなり少なかつたので今回長め。

第8拳「ま、ヒランクが三人に拳士最強がいるなら十分ね」 by 神崎・H・アリ

確かにその日は気持ちのいい朝ではなかつた。

台風接近のせいで大雨。

肌にまとわりつく気持ち悪い湿度。

サボるか迷つたが、キンジをいじり、レキの可愛さを糧としてなんとか登校。

そこで、テンションは低かつた。

そして。

バスに乗れず、徒歩でレキと相合ひ傘をしながら。

俺たちが乗り遅れた武偵高行きのバスがジャックされたという連絡を神崎から受けた時気づいた。

あ、今日は厄日だ。

・・・・・

大雨の下の女子寮の屋上。

そこに俺たちはいた。

キンジと神崎はC装備 強襲用の攻撃型装備

を装備し、俺

とレキは防弾制服のままだ。

神崎は無線を手にし何か怒鳴つてゐる。

が、俺たちに視線を移し、

「ま、ランクが三人に拳士最強がいるなら十分ね」

キンジがすくいやな顔をし

「どういう意味だ、アリア」

「そのままの意味よ、この面子ならアイツ《・・》にも対抗できる」

「アイツ……？」

レキが首を傾げた。

く……。

こんな場面じゃなきゃ抱きしめてる所なんだが……！

「『武姫殺し』よ

……ん？

「おいおい、神崎。そいつは捕まつたはずだろ？」

「そいつは真犯人じゃない。真犯人は別にいるわ

断言された。

何か……知ってるのか？

「根拠は？」

短く、鋭いレキの問いか。

「話してゐる時間は無いわ、バスには爆弾も積まれてゐるさすよ」

取り付く島もない。

まさしく『独唱曲』^{アリヤ} だった。

「やれやれ、どりある？ キンジ」

「どりあるって言われてもな」

続きは聞けなかつた。

より大きい音が屋上を支配したのである。

ヘリの音だ。

車輌科のシングルローター・ヘリが女子寮に降り立とうとしているのだ。

手際がいいな、おい。

これじゃあ、話してゐる時間はない。

ていうか。

ヘリを使うといつ事は。

すなわち上空からバスに飛び下りる……？
あ、ヤベ。

「キンジ」

俺が冷や汗を流している間。

「これがアンタとの最初の事件ね 期待してゐるわよ

「や、やめてくれ、買いかぶつすぎだ」

「買いかぶりならそれはそれで安心しない。あたしが守つてあげるから」

キンジ。

赤くなつてんじやねえ。

お前の方が最近赤面症だ。

・・・・・

レキたちがへりで屋上を去つた後。
未だ俺は一人で女子寮の玄関前にいた。
作戦から外れたというわけではない。
もつと単純な理由だ。
もつと情けない理由だ。

俺、那須蒼一は。

なんと、パラシューートをまともに使えないものである。

……いや、滑空するくらいならなんとかできる。
だが、この大雨の中は無理である。

それを言った時の神崎の顔は中々面白かった。

残念ながら俺が乗れる乗り物は、自転車とバイクくらいだ。
他は絶賛練習中。
もつとも。

それを理由にして何もしないわけではない。
インカムを装着し、通信を繋げる。

「えーと、オペレーターは誰だ？……なんだ、くーちゃんか。よかつたよかつた。え？ くーちゃんはやめろ？ つれない事言つないよ、くーちゃんはうちの嫁の数少ない友達なんだからさ。くーちゃんも友達少ないだろ？ ん？ 名誉棄損？ ははは、そんなこと言うなよ。ホントのことだろ。つーか、オペレーターがくーちゃんで安心してるんだぜ？」

言いながら構える。

足を平行に前後へと配置し、膝を落とし、腰を曲げ、上半身を軽く前傾させる。両手は抜き手の形で、肘を直角の角度に、これも平行に前後へと配置する。体重は前方にかけられていよいよ、若干、前のめりの体勢である。

顔は正面に向け 学園島の外の方向に向く。
今にも駆け出しそうな 動の構え。

「なにせ、レキとキンジ以外に」

虚刀流七の構え、『杜若』。

同時に氣で限界まで両足を強化。

「 本気で走る俺をナビゲート出来るのはぐーちゃんぐらいだからなっ！」

よーい、じんつ！

地面を砕きながら、駆け出した。

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

状況は最悪だつた。

アリアは独断専行と言つていい判断と支持にキンジと共にバスの屋根上に着地。

キンジはバス内に犯人がいないことを確認し、アリアは爆弾を発見。

C4爆弾が3500立方センチメートル。

爆発すればバスどころか電車ですら吹き飛ぶ。

犯人はドSらしい。

アリアが解体を試みた所で、後ろにいたスーパーカーが激突。

直後に車内へ発砲。

運転手が負傷し車輛科の優等生『問題児』武藤剛氣。

彼の免停確定の事実と対してカツコ良くない決め台詞を受け取つて、屋根の上に上がつて。

キンジを庇つてアリアが被弾した。

「アリア、アリア！」

名前を呼んでも、彼女に反応をない。

頭を銃弾が掠めたのだ。

すぐに病院に連れて行かれなければ危ない。

だが、まだ危機は去つてないのだ。

再びスーパーカー ルノーから発砲されたら。

思い、アリアの身体をキンジが抱きしめた瞬間に来た。

・・・・・

『あと5秒』

走る、走る、走る。

『4』

封鎖されている道路故に他の車を気にする必要はない。

『3』

全速で走り、バスとルノーを視界に入れた瞬間さらに加速。

『2』

そして、跳んだ。

『1』

キンジが神崎を抱きしめているのを確認しつつ。

前方二回転の踵落としをルノーに叩き込む！

「虚刀流七の奥義『落花狼藉』！」

固定されていた銃」とルノーを破壊する。

その勢いでそのまま机に向かって跳躍し、バスへと飛び乗る。そして、

『到着です』

「すまん、遅くなつた」

「遅えよ、この馬鹿ー。」

おーおー。

女子寮からここまで走ってきたんだぜ？
もつと、褒めてくれてもいいだろ？
だが、まあ。

この状況なら仕方ない。

「どんな塩梅だ？」

「息はしてる、けど頭に被弾したんだ。なにかあってもおかしくないー。」

「落ちつけ」

言ごながら、神崎の傷口に触れる。

どりりとした血液が指に触れるがきにしている場合ではない。
彼女に自分の気を流しこむ。

気には治癒力を回復させる力もあるのだ。
量によっては致命傷でもある程度は回復で来る。
もつとも傷のみなので、脳はどうしようもない。

「傷はこれでいい、さつと病院だな」

「だが、爆弾を何とかしないと…」

「そいつはどうしよう?..」

「ちゃんと考へろ!..」

考へてるや。

酷いなあ。

思つた所で。

『那須さん、新たにバスに近づくルノーがいます!..』

くーちゃんの声が聞こえた。
そして見る。

「おいおい、そりゃあないぜ」

やはりルノーだ。

いつのまにかいた。

封鎖されていたはずの道路上に。
先ほどと同じ。

それは対して問題ではない。
載つているモノが問題だつた。

狙撃銃。

アンチマテリアルライフル・バレットM82A1。

1・5キロメートル先の敵兵も両断できる強力な対物戦車ライフル。

それが載つていた。

発砲され被弾すれば俺たちどこのかバスの屋根も吹き飛ぶ。
そんな代物が今にも銃弾を吐きだす直前　！
ソレの存在を確認した瞬間に叫んだ。

「キンジ！　神崎連れて下に行け！　ついでに中の連中を前の方に
集めろ！」

叫びながら構える。

両足は前後に広げ、左足は前、右足は後ろにしつま先はどちらも
前に。

腰を大きく捻つて、右肩を大きく開き、右腕を後ろへ振りかぶる。
左腕は前へ突きだす。

手はどちらも軽く広げる。

右手を大きく振りかぶる動の構え。

虚刀流　ではない。

それを見た瞬間、キンジは血相を変えてバス内に飛び込む。
コレの意味を理解できたからだろ？
これの、この構えの意味は　。

・・・・・・・・・・

「全員、前方に来い！」

キンジは中に入った途端に叫んだ。
全員ともきょとんとしたが、

「蒼一が」

続くキンジの言葉を聞き、

「拳士最強が本気を出すぞー！」

反応は迅速だった。

全員が転がり込んだ。

もつれ合いながら、それでもキンジはアリアを庇つ。
そして。

バンと一つ音を聞いた瞬間。

「ハセキウツクシ天蒼行空」

バスの屋根、前半分が吹き飛んだ。

第8拳「ま、 ランクが三人に拳士最強がいるなら十分ね」 by 神崎・H・アリ

相も変わらず嫁レキの人気は止まらない……！

自分で書いて、何回も確認してるとよくわかんないんですね。
どなたかどのくらいうちの嫁レキが笑激的（誤字にあらず）か教えてくれないですかねえ……？

くーちゃんがだれかはわかりますよね？
ええ、あの前髪っ子です。

感想、期待させていただきますよー。
どんどんお願ひします！

次回、嫁レキヒヤツハータイム。

街の風景が流れていく。

「ぐ、あ、あ……」

痛みに顔しかめる

バスの上でへたりこむ。

跳ね上がったバスの屋根前の部分に背を預ける。

「蒼ー！無事か！？」

バスからキンジが出てきた。

そんなに慌てんなよ。

「よう、なんとかなつたぜ？　とりあえず」

「まだ終わってないし、どこか怪我は――！」

いやいや。

無いわけないだろ。

「お前、腕が！」

そう。

今、現在俺の右腕はボロボロ立つた。

指は五本とも変な方向に向き、腕は裂傷でズタズタだ。

拳士が手を潰すなんて、文字通り両腕をもがれたのに等しい。気を使っても完治に一週間はかかるだろう。

それでも。

コレですんだくらいでましかもしれない。

なにせ

「 こんな場所でアンチマテリアルライフルの弾丸を叩き落とすのは無茶だったか」

「当たり前だろ！」

飛来した弾丸を平手で叩き落としたのだが。
バスの上という場所が問題だった。

単純な踏み込みの動作が出来ないからだ。
もし本気で俺がバスの上で踏み込んだら、 それだけでバスが壊れる。

それゆえに足場の悪い時用の奥義『天蒼行空』^{てんそうけう} だが、 流石に
アンチマテリアルライフルの弾丸の相手は想定外だった。

第一それでも、バスの屋根は半ば吹き飛んだのだ。

「くそ、 地面の上ならこんな怪我はしないんだけどなあ！」

「負け惜しみかよ！」

負けてねえよ。

ていうか、こんなこと考へてる場合じや ない。

「おい、 ルノーは？」

ルノーは未だバスの後ろには張り付いたままだ。
一発目が来ないとも限らないのだ。

「くそ、どうすれば ！」

キンジが顔を歪める。

神崎も俺も負傷。

おまけに今のキンジではビリしようもない。

だけど。

忘れてないか？

「おいおい、キンジ。人の嫁忘れんなよ」

橋にバスが入り。

瞬間。

『私は一発の銃弾』

ぱあんぱあん。

突如、一発の弾丸がルノーの前輪タイヤを撃ち抜いた。

・ · · · · · · ·

「私は一発の銃弾」

ヘリの中ではレキは言葉を紡いでいた。

ドアは開かれ、立ち膝の姿勢でドラグノフを構えている。

「全てを撃ち抜く一発の魔弾」

スコープの中には負傷した那須蒼一が見えた。腕を負傷しているようだ。

拳士の彼にとつては精神的にもダメージが大きいだろう。後でちゃんと看病しようと決めながらも更に言葉を紡ぐ。

「瞳は照準、指は引き金、意志を劇鉄に」

愛銃を構える。

ドラグノフ狙撃銃。

射程距離は600メートルほどだがレキには関係ない。何故ならレキの絶対半径は2051メートルだからだ。

射程距離600メートルに絶対半径2051メートル。矛盾しているが していない。

実際にレキがドラグノフ狙撃銃で限界距離の標的を撃ち抜くのを那須蒼一を初めとした何人もが見ていて、

それも針穴を通すような正確さ、でだ。

現時的にはありえない。

先に言つておけばレキは超偵、いわゆるステルス持ちではない。特別な能力も無く、しかしそれらを実現させる。

それはもはや異常だ。

それが彼女の持つ異常だ。アブノーマル

それが彼女の持つ異能だ。

武器が何であろうと、自らの絶対半径内キーロングレンジの対象を100%撃ち抜く異常——！

その名も。

「心を弾丸に 『魔弾姫君』スナイプリンセス」

引き金を引いた。

ぱあん。

狙いはバスの下部に張り付いた爆弾。

それを撃つ。

爆発せぬように、接着部分のみを撃ち抜いて！
バスから外れ、道路を滑つた所でもう一発。

ぱあん。

橋から落とし、川の中へ落とした。
着水、爆発。

水飛沫が上がり虹がかかる。

それを確認し、両足で立つ。

インカムに手を当て、

「何か言つことはありますか？」

『ありすぎて困るけどまず一つだ』

「なら、私も一言」

愛してるぜ、ハニー。

愛してます、ダーリン。

第9拳 「心を弾丸に

『魔弾姫君×スナイプリンセンセス』

ｂｙレキ（後

魔弾姫君は漢字だけなら（まだんきくん）と読んでね。
嫁レキは今流行りの異常。^{アブノーマル}

スキル等に意見お願いします。

発砲時の詩もアレで固定。

感想お待ちしてまーす。

次回も嫁レキの回。

第10拳「ああ。俺は今世界で一番幸せだ」 b y 那須蒼一

「いやあ、今日はレキに救われたなあ」

「いえ、私は良いとこ取りも良い所でした」

何言つてるかわからんねえよ。

俺は病室のベッドの上で上体を起こして、その横でイスに座るレキ。
バスジャック事件の翌日。

俺、那須蒼一は絶賛入院中だった。

なにせ指は五本とも複雑骨折、腕から肩にかけての裂傷。

右
腕は包帯とギプスに覆われている。

キンジは軽傷。

神崎は頭に被弾したが問題なし。

一応、念の為に同じ病院で入院中だ。

彼女はVIP用の個室らしいが。

俺は普通の個室。

扱いの差が、ひどい。

「それで、蒼一さん。怪我の具合はどうですか？」

「医者が言つては、普通なら2、3ヶ月はかかるとよ」

「……氣を使える蒼一さんなら？」

「2週間」

「そうですか」

レキは一つ頷いて。

そして、何かに気づいたように。

「ああ、蒼一さん。少し待ってください」

そう言いつつレキは据え置きの机にあつた果物の盛り合わせ
くーちゃんから貰つたらしい から林檎を手に取り、フルーツ
ナイフも握り、

「…………」

林檎を剥き出した。

「な…………」「…………」

レキが林檎を剥ぐだと…………！？

あのレキが！

食べ物関連はカロリーメイトのような栄養食品しか知らないレキ
が！

「こ……最近ようやく普通の食事をするようになったレキが！

それでも、やっぱりカロリーメイトばかり食つてるあのレキが！

「れ、レキ……？ 林檎なんて剥けるのか……？」

「ええ、こ前の前田雪さんに教えてもらいました」

手の動きを止めずにいった。

「…………なんだと…………」

星伽から教えてもらつただと！？

あのレキが！

少し前まで風が風が言つていたレキが！

そのせいで友達がほとんどいないレキが！

くーちゃんや平賀くらいしか女友達がいないレキが！

「……何か失礼な事考えてませんか？」

「いえ全く考えてませんか？」

「……ならいいですが」

そうしてしばらくして。

「出来ました」

小皿に切つた林檎を乗せて差し出した。

正直に言えばきれいとは言い難い。

余分な果肉も皮と一緒に剥いたのか、大部サイズが小さい。
が、しかしだ。

「はい、あーんです」

レキが上目遣いでほんちょつぴり頬を赤く染めて差し出した林檎
が！

おいしくないわけない！

レキが上目遣いでほんちょつぴり頬を赤く染めて差し出した林檎
が！

大事な事だから一回言つた！

「あーん」

一口で行った。

「おいしいですか？」

「今まで食べた林檎の中で一番つまい」

「それはよかつたです。……幸せですか？」

「ああ。俺は今世界で一番幸せだ」

「なりいいです。幸せタイムはこれで終わりですので」

「え？」

「正座してください」

「え？　え？　レキ、さん？」

「正座しなさい」と言つてゐるんです

「あ、はい」

正座した。

……なんで？

なんで俺は怪我で入院して恋人に正座をせりれてるんだ？

「いいですか、蒼一さん。私は怒ります」

「はあ……」

「4ヶ月前の約束を覚えてますか?」

4ヶ月前といえば。
そう、俺がレキを。
自らの主と定めた頃だ。
そして、その時。
それは。

「あのレキがやつてみたいとかについて強制的にやられた約束か」

「それはどうでもいいです」

「あ、はい」

「覚えてますね?」

「そりゃ あなた

一つ、レキを守れ。
二つ、相手すらも守れ。
三つ、自分を守れ。
四つ、自分を守れ。

「主を守るのは当然、武道であるがゆえに相手を殺さない。それに拳士最強であるために負けるな。そして、俺が俺るために戦え、だ」

「はい、私はそう言いましたね」

「そして俺は極めて諒解、と答えたな……ああ」

「そうか。

レキが怒っている理由が分かった。

「ライフル弾くらい無傷で叩き落とせつてことか？」

「違います」

「違った。
あるえ？」

「そんな無茶は言いません。ですが」

「区切つて、

「…………ですが、拳が使えなくなるかもしれない怪我は止めてください」

「拳が握れなくなつたらどうするんですか、とレキは問いつ。
あなたは拳士最強なんですから」と。

「私はそんなあなたを見たくありません

「そう、言つて目を伏せるレキ。

それを見て、俺の心は暖かくなる。

正座を崩し、

「大丈夫だ。拳がダメなら脚で、脚がダメなら体で、体がダメなら

□で。

俺はレキと一緒に西廻続けるよ

「蒼一 もん…… だれが正座を崩していこつて言いました?」

「あ、スマセン」

正座し直す。

レキは呆れたように首を振り、

「反省してますか?」

「はー」

「……証拠は?」

「向をすれぱいこでしょ!」

そうですね。

「とつあえず 私が心配した分だけ優しく抱きじめて、キスして
ください」

「…………」

「ああ、うひ、うひ。

第10拳「ああ。俺は今世界で一番幸せだ」 b y 那須蒼一（後書き）

次回は少し開くかも。

感想お待ちしてます。

12 / 8 微修正

第1-1拳『兄弟』b γ那須蒼一 &遠山キンジ（前書き）

アクセス600000越え。

ユニーク10000越えました。

これからもよろしくお願いします。

第11拳『兄弟』b γ那須蒼一 &遠山キンジ

風が強く吹く病院の屋上。
ズズー。

「……」

ズズー。

「……はあ」

さてさて。

缶コーヒーを飲みながら考えよう。
隣で情けない顔をしている親友をどうするかを。

・・・・・・・・・・

『性々働く《ヒステリアス》』。

それがキンジが抱える異常だ。アブノーマル

命名俺。

キンジはヒステリアスモードと呼ぶ。

正式名称は『H・S・S』ヒステリヤ・サンシンドロームという体質らしい。

実に単純なスキルだ。

『異性に興奮することによって驚異的な戦闘力を得る』。もつともそれは結果であつても目的でない。

このスキルの目的は子孫を残す事にあるらしい。つまり、スキル発動中は異性に好かれようとするのだ。つまり、女性に対しどうしようもなくキザになるのだ。

……笑ってはいけない。

そのせいで中学時代にいろいろあつたらしい。

利用されたらしい。

便利にされたらしい。

道具のようにされたらしい。

あまり好きでは無かつたと、当時のキンジは思っていたらしい。それでも、いつか使いこなせると思っていたらしい。

ただ。

キンジが自らの異常を嫌悪したのは（今はともかく）彼の兄、遠山金一死んだ時ということは 知っている。

・・・・・

俺とレキが神崎の病室に行き、見たのは今にも泣きそうキンジの顔だった。

中の神崎はレキに任せ、俺とキンジは缶コーヒー片手に屋上へ来たのだ。

「……アリアはさ、俺に期待してたんだよな

キンジがぽつりと言った。

屋上の柵の手すりに身を預けながら。

「…………」

「でも、オレは何もできなかつたか……はは

「…………」

「情けないな

キンジは拳を手すりに叩きつけた。

怒っているのだ。

神崎にではない。

『武偵殺し』の犯人ではない。

自分にだ。

何もできなかつた自分に怒っているのだ。

怒りに身を震わせているのだった。

それを見て俺は。

やれやれと思う。

暗いし根暗だし辛氣くさいし面倒だし空氣重いし鬱だし手痛いし
レキといぢやつきたいしなんか美味しい物でもつて食いたいな。

そのためにはキンジがこんなままでは困る。

だから、声をかける。

決して キンジ心配だからではない。

「やつぱり武偵なんて止め 」

「 なあ、キンジ。神崎はお前に何を求めていたかわかるか? 」

「え……?」

「だから、理由だよ。お前を奴隸にした理由」

「それは……武偵としてのアシストが必要だったからじゃないのか
……?」

「そんなわけないだろ、99回一発逮捕の失敗無しがどうして今更
武偵としてのアシストを必要とする?」

「あ……」

そう。

そこまでの実力があるのなら一人で十分だ。
奴隸など 必要ない。

一人でも問題ないはずだ。

それでも、奴隸をキンジを必要とするのは、

「武偵としてのお前を求めてるわけではないってことだろ」

「
！」

無論、武偵としての強度は高ければ高いほど良いだらう。
けど、それは二の次だ。

神崎・H・アリアは天才だ。

それも、まだまだ成長する天才性だ。

そして、天才は孤独だ。

孤独であり 孤高でなければならぬ。

普通に紛れれば天才ではいられなくなるのだから。
だから、他人が解らない。

他人と分かり合えない。

他人に理解されないのだ。

そういう天才を俺は知っている。

そいつらの思いを俺は知らなかつた。

天才たちだつて、独りがいいわけがないのだ。

他人と解りたい。

他人と分かり合いたい。

他人を理解したい。

そう思つているのだ。

俺がそれに気づいたのはもう全てが遅かつたけど。

「神崎は武偵遠山キンジ《…………》を必要としてるわけじゃないはずだ。お前自身が必要としてるんだよ」

「

キンジは田を見開き聞き入つて居る。
どうして、いつも鈍いんだか。

「だからさ、勝手に諦める前にちやんと神崎と話していい。正直に、思つた事を、溜め込んだことをね。そうしねえと始まんねえよ」

俺は 出来なかつたから。
キンジにはできてほし。

「 そつか、なあ蒼一」

「 なんだよ」

「 すまんな」

は。

根暗の癖にいきなりイケメンにもどりやがつた。

「 気にすんなよ、あと武偵止めるとか言つた。4ヶ月前にお前がいなかつたらさあ 僕もレキも死んでたぜ」

それに親友は放つておくわけにもいかない。

つーが、 じゅごつ時てあやまさんよ。
じゅごつ時は。

「あつがとな

「 気にすんなよ

拳をぶつた、

『兄弟』

じゅごつもんだろ？

第1-1拳『兄弟』b『那須蒼一 & 遠山キンジ』(後書き)

前回嫁レキで「ヤーヤ」したが、今回は男の友情で「ヤーヤ」……できるかなあ?

もつとすぐ武道殺し編も終わるのドアンケートと取ったいと思います。

A、過去編

那須蒼一とレキの始まり。
蒼一が拳士最強になるまで。
無口レキが嫁レキになるまで。

B、魔剣編。

基本原作通り。

但し、嫁レキ無双。

いつもいつもイベントもたくさん。

どうぞ意見お願いします。

第1-2 「無傷で帰ってきたら続きをしてあげます」 bソレキ

「あー、暇だ」

神崎が退院して、数日後。
俺はものすごく暇だった。
レキは学校、キンジは顔すら出さない。
神崎とは上手くいっているのかも謎だ。
今の俺は大人しくアニメでも見るしかない。

「三発殴つて倒せ、か……ううむ。かけえなあ」

決め台詞か……。

最近全く使つてない。

「最近は平和……かといえば疑問だが言つ機会は無かつたなあ。

「ふあ、なんかないかね？　おもしろいこと」

電話がなつた。

表示は　遠山キンジ。
ふむ。

「おーう、どうした？　白状者」

『蒼一！　今何してる…？』

「ああ？　レキは学校だし、お前も全然見舞い来ないから一人でア
ニメ鑑賞だせ」

『……っ！ 無理を承知で頼みたいことがあるー。』

「いいぜ、何をすればいいんだ？」

『7時前までに羽田空港に来てくれー！』

「分かった。待つてる」

『……蒼一』

「ん？」

『……ありがとな』

は。

「感謝しろ」

電話を切る。

時間は6時過ぎ。

走れば、間に合つだらう。

ベッドから出て、部屋に備え付けのクローゼットから防弾制服を取り出す。

着替えるが、

「……ネクタイは……」

右手が未だギブスに覆われているのでネクタイが結べない。迷い、ノーネクタイで行こうかと思って、

「やりますよ

レキが、いつの間にかいした。
ネクタイを手に取り、結んでくれる。

「……悪いな

「いえ

病室に布ずれの音が響いた。

「私もついて行きましょうか？」

彼女は行くのかと、問わないし何処へとも問わない。
まったく　いい女だせ。

「んー、まあ大丈夫だろ、俺一人で」

「そうですか

きゅつ、ヒネクタイが結び終わった。

「なら、ちちゃんと帰つてきてくださいね　待つてますから

「おひ

靴を履き、病室を出ようと、

「あ、待ってください」

「ん？ ビヘ」

「ちゅう」

レキの唇と俺の唇が重なっていた。
十秒か二十秒そのまままで。

「……ん」

離れた。

「無傷で帰つてきたり続きをしあげます」

「…………おつ、行つてくわ」

「はー、行つてらっしゃー」

レキを置いて病室を出る。
病院も出で、

「ふ、ふふふ

ふふふふふ、ハハハハハハハ。
さすがはレキだぜ。

さすが我が嫁！

「やる気でやせるのが上手いなあー。」

走つた。

そりやもつ走つた。

「わははははははー。」

笑いまくつながら走った。

・・・・・・・・

そのあと空港にて、キンジと会流。
話を、聞けば神崎が英國に帰ろうとして、その飛行機に武慎殺しが
ハイジャックをしかけるらしい。
まず、感想は、

「お前、俺にあそこまで言わせて玉の輿逃したのかー。」

「そうこう話じゃないだろー。」

叫び合いながら、飛行機に乗り込み、

「武僧だ！ 今すぐこの飛行機を止めろ！」

「お前がハイジャック犯か！」

そして、神崎と合流し人の事そつちのけで痴話喧嘩。

おまけに雷にビビった神崎をキンジが慰めだした辺り、あれ？
俺って必要？ なんて思いだした瞬間だった。

ばあん。

銃声が飛行機内に響いたのは。

第1-2 「無傷で帰つたら続おをしてあがまや」 b レキ（後書き）

アンケート引を続きやつてしまーす。

武僧殺し編後、どうちか意見ください。

A、過去編 那須蒼一とレキの始まり。 蒼一が拳士最強になるまで。 無口レキが嫁レキになるまで。

B、魔剣編。 基本原作通り。 但し、嫁レキ無双。 いぢりつきイベントもたくさん。

現在、A 4

B 3

「のままだと過去編ですねー。

第1-3拳「

その落ちじみれに負けて、お前は超落ちじみれになるんだ。

12 / 14 タイトル修正。

自分がどう存在を認めて欲しい。

それが峰理子の願いだった。

否、天下の大泥棒アルセーヌ・リュパンの曾孫。
理子・峰・リュパン4世の願いだった。

俺たちは銃声におびき寄せられて。それを知つた。
聞いた。

彼女の聞くに耐えない話を。
彼女の語るに忍びない話を。

キンジ、神崎、峰たちの会話を。

それに俺は口を挟まなかつた。

ただ、聞いていただけだ。

なぜならそれらの会話は、“受け継いだ者”的だ。

だから このハイジャックに於いて俺が動いたのはその後だ。
神崎と峰のアル＝カタにより神崎が負傷し。

キンジが神崎を、連れて撤退。

応急処置の時間稼ぎに残つてからである。

・・・・・・・・・・

「俺はお前が『ひりやまし』よ」

峰と対峙し、最初の言葉だった。

「ああ……？」

「だつてさ、4世つて呼ばれてる」とはい先祖様の後継者として認められてるって事じやねえか」

俺にはそれがうらやましい。

俺は認めて貰えなかつたから。

俺は 落ちつけばれだつたから。

「どうせ、俺の事も知つてるだろ?」

キンジの『性々働くヒステリアス』も知つていたのだなならば、

「 那須与一」

理子がある名前を口にした。
その名前に俺は口元を歪める。
自嘲の笑みだ。

「那須与一、それがお前の先祖だ」

「（）答答」

那須与一。

高校や中学の授業では、何度かでるであろう人物だ。

『平家物語』において遠く離れた扇の歴史を射抜いた『』の名手として。

源義経の家臣。

家系的に見れば俺の23代分前の人物だ。

「やっぱ知つてたか。なら俺が落ちこぼれである理由もわかるだろ？」

？

「……正直信じられないな。まさしく小説やマンガの話じゃないか」

まあ、そう思うだろうな。

そうであつたらどれだけ良かつたか。
だが、

「現実だせ？」

俺が『』いろいろか銃とかの飛び道具が一つも

使えないのは

「まるで、呪いだ」

理子は吐き捨てるように呟つ。

まるで、ではなく。

俺にとつてはまさしく呪いなのだ。

飛び道具が全く使えない。

弓に矢をつがえることができない。

飛んでも1メートルも飛ばない。

銃ならば、弾を込めれない。

込めよつとするところれ落ちる。

引き金を引けば不発。

最悪の場合は暴発。

弾詰まりは当たり前。

弓に銃だけではなく。

投げ槍も投石でもブーメランでも投げナイフでもダーツでも輪投げでもスーパー・ボールでも砲丸でも十字架でも巻き微志でも手裏剣でも苦無でもなんであろうと関係ない。

あまねく投擲物を俺は使えない。

そんな存在が『弓』の名家である那須家で落ちこぼれ無いわけがない。

「それが俺が落ちこぼれである所以だ。『那須与一24代目』を受け継げなかつた理由だ」

最も それだけ、という訳ではないが。
これに関しては言ひ気はない。

「なあ、蒼一」

初め峰から声をかけられた。

それまでの狂ったような声ではない。

「お前はイ・ウーに来い」

「あ？」

「イ・ウーに来れば落ちっぽれじやなくなるかもしれないぞ？」

「

きつとお前みたいな人間の為にああいう場所は在るべきなんだ、
と彼女は言う。

それに対し、俺は。

「そういうアートの誘いはキンジにしろよ」

俺はどこにも行かない。

俺の帰る場所は どこでもない、レキのいる場所なのだから。
かつて 雨と血に塗れながら彼女と約束した。
どこでもない、お互いが共にいられる所にしようと。
そして 俺は構える。
構えるのは、

「虚刀流七の構え、『杜若』」

今にも駆け出しそうな動の構え。

右手は力を抜いておく。

飛行機の中では本氣では戦えないから。

こんな所で本氣だしたら誇張抜きで飛行機が壊れる。

そういう意味ではハイジャックについては俺に対する妙手だ。

「さあ、峰。悪いが時間稼ぎのつもりは無い。ひとつお前を捕まえて帰りたいんでな」

なぜなら レキが待っているのだから。

「 は。やつて見ろよ、本氣も出せず、タネの分かっている流派を使って何ができるのかを」

ああ。

知ってるよなあ。

コイツは結構なオタだし。

「見せてみるよ、落ちこぼれー！」

「 その落ちこぼれに負けて、お前は超落ちこぼれになるんだよー！」

約4ヶ月ぶりの那須蒼一の決め台詞である。

そして、飛び出した。

第1-3巻「

やの落ちこぼれに負けて、お前は超落ちこぼれになるんだよ

アンケート引を続かせやつてしまーす。 武偵殺し編後、どうちか意見
ください。

A、過去編 那須蒼一とレキの始まり。 蒼一が拳士 最強になる
まで。 無口レキが嫁レキになるまで。

B、魔剣編。 基本原作通り。 但し、嫁レキ無双。 いぢやつさ
イベントもたくさん。

アンケは、今週までもうこやる予定です。

巡回でもアンケやつてるのでもうしちもよろしくお願ひします。

感想等待つてます！

第14拳「くふ」 b y 理子・峰・リュパン・4世（前書き）

まず、刀語の、ファンのみなさまへ。

当方土下座の用意あり。

カッとなつてやつた。

後悔はしていない。

第14拳「くふつ」 b y 理子・峰・リュパン・4世

虚刀流。

虚しき刀の流れ。

刀を使わぬ剣法として、数多の技をもつ。

その中で奥義は九つ。

一の奥義『鏡花水月』。

二の奥義『花鳥風月』。

三の奥義『百花繚乱』。

四の奥義『柳緑花紅』。

五の奥義『飛花落葉』。

六の奥義『錦上添花』。

七の奥義『落花狼藉』。

最終奥義『七花八裂』。

その改良版『七花八裂・改』。

その九つの奥義が実際に作中で使われた奥義である。
それをもつて虚刀流は完了しているのだ。

・
・
・
・
・
・
・
・
・

杜若の足裁きをもつて機内を駆け抜けた。

向かう先は峰だ。

その顔には勝ち誇るような笑みを浮かべていた。いや、実際に勝利を確信しているのだろう。

なにせ、この狭い機内では俺は本気を出せない。

自身が編み出した奥義『蒼の一撃シリーズ』はこんな場所では使えない。

発動の際にどれも強烈な震脚を必要とするからだ。さらに足場を必要としない『天蒼行空』もだめだ。あれは振りかぶった平手で、掴んだ風を対象にぶちまける奥義である。

こんな密閉空間でつかつたらどうなるかなんて考えたくもない。

第一右手が使えない以上半分が使えないのだ。

たがら虚刀流に頼らざるをえない。

だから、峰も笑っている。

虚刀流を知っているから。

だから俺も笑った。

「虚刀流奥義！」

峰の懷に飛び込んでいく。

右の脇を通り抜けるように。

そして、一回転。

回りながら、体を傾ける。

右足を振り上げ、軸足の左は床を蹴る。

そして、その体勢でぶち込むのは右足だ。

宙に浮きながら、右足を大太刀に見立てた飛び込み回転袈裟蹴り！

『快刀亂花』！

虚刀流九の奥義、『快刀乱花』！

それに峰は何の反応も出来ずに左肩から右の脇腹へと直撃する！

「が、ああああああー!?」

峰の身体がぶつ飛び

「……髪でガードされたか。直撃のはずだつたんだけどなあ」

神崎を戦闘不能にした自律する髪。
技名とかあるのだろうか。

無かつた辺付けてみたしなあ

「え、何で、だー。」

機内を転がつていつた峰が起き上がり叫ぶ。
信じられないものを見たよ。

「そんな、そんな技は虚刀流には無いはずだ！」

「ああ、無いよ。だつて俺が考えたんだからな」

۷

おいおい、驚きすぎだろ。

「お前さ、オリジナル必殺技って考えたことないのかよ」

絶対と言つていいだろ。

誰だって好きなマンガや小説にアニメで自分オリジナルの要素を入れたくなる。

それは最強の主人公だつたり、
それは無敵の必殺技だつたり、
それは可憐な女の子だつたり、
誰だつて考える。

俺は自分で奥義を作つた。
刀を使わない剣法として。

「自作虚刀流奥義、全4種。まあ、あと3つは手技だから見せれな
いけどな」

もつとも 正確に言えばそれらは虚刀流ではない。
骨肉で伝わる流派である虚刀流において、俺自身は遺い手になれ
ても扱い手にはなれない。
でも、まあ。

「言つたもん勝ちって話だよな」

「つー」

峰は顔を歪める。

それでも、彼女の足は震えてのだか。

「さて、キンジたちを待つまでもないな。理子・峰・リュパン・4

世、殺人未遂やらその他諸々で逮捕させても「ひりひり」

そう言つて、一歩踏み出した瞬間だった。

峰が、僅かに笑つた。

そして、

「なあ――！」

床が大きく傾いた。

突然のことにより、姿勢が崩れる。
それでも、すぐに体勢を立て直す。
たが、遅かつた。

「くふっ」

ぱあん。

僅かな隙に峰は銃を構え、発砲していた。

狙いは正確に俺の顔。

当たれば死ぬ。

だから 反射的に右手で弾いてしまった。
普段なら問題無かつただろう。

ただの拳銃の弾を弾くなんてのは朝飯前だ。
がしかし、今はダメだ。

なぜならば、先のバスジャックにより俺の右手は使えない。
それでも、反射的に使つてしまつた。
死ぬことはなかつたが、代わりに。

「あいた――！」

思いつきり叫んだ。

「こうか叫ばずにはこりれない。
めりやくせられ……。

「くふつ、形成逆転つてヤツだな。ビツかるへ。」

ぴーんち。

峰はかなりいい笑顔で、銃とナイフをひらつかせる。
輝いてるなあ。
どうだ。

「……ビツかるか、か」

脂汗が噴き出るのが分かる。
こんな状況でなかつたら痛みに悶絶していのだろう。
……しかたねえ。

「俺も逃げるわ」

「くふつ？」

じや、と手を上げて。
後ろへと走りだした。
峰を置き去りにして。

有り体に言えば　逃走だつた。
だつて、ものすごく痛いからな？

・・・・・・・・・・・・

「あー、くそ。傷口が開いてんなコレ」

ひとまず峰が追つてこないことを確認して、廊下に座り込む。
脂汗は未だに止まらない。
くそう。

「これじゃあ、帰つてレキの『豪美が無し』……」

「やれやれ、相変わらずだな。蒼一」

「…？」

振り返ったそこにはキンジと神崎がいた。
だが、

「オイコラ、お前ら人が頑張ってる時になにしてたんだよ

様子が明らかにおかしかつた。

神崎は顔が真っ赤。

ブツブツと/or>なにかを言つていて。

そしてキンジはすでに『性々働く《ヒステリアス》』を発動して
いた。

それもなんといつか、今までに無いヒスリ方だつた。
もう滲み出るオーラが違つた。

「ふ、悪いがそれは俺とアリアだけの秘密だ。な、アリア？」

「ふ、ふあい！？」

……もつキヤラ崩壊してゐや。

「さて、蒼一が頑張つてくれたんだ。俺たちも頑張らないとな。な
に、大丈夫だよアリア、俺と君なら、ね」

キンジよ、今のお前はウインク禁止だ。

神崎が照れて使い物にならなくなるだろうが。

第14拳「くふ」 b y 理子・峰・リュパン・4世（後書き）

オリジナル変体刀はよく見るので、オリジナル虚刀流ってあんまり見ないですよね。

一度妄想したら止まらなくなつてやつてしまつた。

アンケートはA4

B12

となつております。

これはもう、Bで決まりですかねえ。

なので、一応アンケートは明日の〇時までとします。

皆さん楽しみは最後までとつておく人が多いようですね。

武偵殺し編も後ちょっと。

12/16 追記。

アンケート終了しました。
詳細は次話で。

第15拳 「存じの通り、『武慎殺し』『ワタクシ』は爆弾使いですか？」

「理子・峰・リュパン・4世…殺人未遂の現行犯で」

「逮捕するわ！」

キンジと神崎が峰に銃を突きつけて宣言する。
なんというか……。

相変わらず恙ないなあ。

そう思いながら俺はシャワールームから一連の出来事を覗いていた。

・・・・・

キンジが立てた策はダブルブラフだった。

ベッドにいると見せかけて、

シャワールームにいると見せかけて、
どっちもブラフ。

ベッドは丸めた布団が。

シャワールームには俺がいた。

本命の神崎はキャビネットに。

シャワールームの人影に気を取られた峰に神崎が奇襲をかけてチ
エックメイト。

初めは大丈夫かと思つたが、上手くいった。

そのあたりはさすがと言つた所だ。

しかし、俺はシャワールームから出ながら思つ。

「キンジ、今の流れで峰がシャワールームに発砲したりするつ
もりだつた？」

「……？　お前、拳銃の弾くらいで怪我するのか？」

いやいやいや。

そりやあ、氣で防御しておけば直撃したつて傷ひとつかないけど
よ。

なんか違つんじゃね？

「くふつ、お前は空氣だったな。蒼一」

「うるせーーー！」

ちょっとだつて思つてないからな！

ホントだぞ！

ていうか、ここまで追いつめられていて酷い事言つてんじゃねえよ！

思ったその時、

「ぶわあーーか」

峰の髪が蠢いた。

それをキンジが止めよつとしたが

遅かった。

「ーーー！」

床が大きく揺れた。

飛行機が急降下しているのだ。

全員の姿勢が大きく揺れた。

ただ一人を除いては。

「ぱいぱいきーん」

腹の立つ捨て台詞を残して行く峰は姿勢が乱れることなくしつかりと走つている。

俺の脳裏に先ほど峰を捕まえようとした瞬間のことがフラッシュバックする。

これは！

「キンジ、あいつ！」

「ああ！ 髪にコントローラーが何かを仕込んでたんだ！」

いくらなんでも、あいつにばかり有利に揺れすぎだつたのだ。

機体がどんどん高度を、下げていく。

俺とキンジは峰を追い、神崎は「ツクピツト。」へ。

……いい加減、この追いかけっこにも飽きてきたぜ。

・・・・・

峰は下の階のバーの窓に背中を押しつけて、立っていた。
否 待っていたのだ。

「狭い飛行機の中 どこへ行こうかというんだい、仔リストちゃん
？」

「は、こいつには女狐か女狸がいいだろ」

「くふつ、キンジ。近づかないほうがいいよー？」
蒼一はいい
けど

誰が行くか。

怪しさ爆発じやねえか。

峰の背後の壁際、細い粘土状のもの まあ、十中八九爆弾
が貼り付けられていた。

そして、峰はスカートの端をちょこんと摘み、軽くお辞儀して、

「ご存じの通り、『武偵殺し』は爆弾使いですか
？」

それは、正直ムカつくなっている様になっていた。

「ねえ、キンジ。キンジもイ・ウーに来ない？　この世の天国ださ。
なにより　お兄さんもいるよ？」

「黙つてくよ、理子。これ以上に兄さんの話をやれると俺は衝動的に武憲憲章第9条を破つてしまつだらう、俺にとつても君にとつてもいいことではないだらう。」

それに、理子はからかうと笑い、

「そつかー。それは困るなあー。じやあ蒼一は？」

「あ？　そつかも聞いたけど、

「遙歌もいるよ。」

「ちょっと待て。
何故。
どうして。
なんだって、今この場所で。
今更
アイツの名前が出てくる?
」

どうして 6年前にも死んだアイツが。

当時、十歳だった俺の唯一の家族。

たつた一人の 妹。

那須家の最高傑作。

例外的な天才であるアイツの名が――――――！

「理子・峰・リュパン・4世――――――！」

俺は、衝動的に足を踏み出した。
踏み出さずにはいられなかつた。

瞬間。

「 安心しなよ。いつでも歓迎するからね？」

ドウツツツッ！――――――！

峰の背後が爆発。

出来上がった風穴に峰は自ら飛び込み、
俺は、

「 あ

なすすべもなく、空中に放り投げられた。

第15拳 「存じの通り、『武偵殺し』は爆弾使いですか？」

アンケート結果です。

A 4
B 13

でした。

というわけで、武偵殺し編の次は魔剣編をやります！
もつとも、その前に何か番外編をやると思いますが。
どうしようかなー？

武偵殺し編はあと多分2話。

俺の妹、那須遙歌について語る事はない。

いや、ないというよりも語りたくないと言つべきか。
それこそ語るに忍びない話だから。

とりあえずは、身体的外見を述べてみよう。

肩まで伸ばした濡れ色の髪。

陶磁の如き白い肌。

兄である俺と対になるような紅い瞳。

日本人形のような少女。

否 美少女か。

もつとも、6年前の話だが。

彼女はたった一人の家族だった。

後にレキや握拳裂、キンジたち出会つ前。

まだ俺が那須家本家に住んでいた頃の話だ。
もう6年も前の話だ。

そして もう終わつてゐるはずの話だった。

『ねえ、兄さん。安心してね、これで

彼女がなんて言つたかは思いだしたくもない。

・・・・・・・・

「――っ！」

見えた！

走馬灯！

これが噂の走馬灯！

一瞬だけだけど！

我に返った瞬間、

「――！」

全身に雨風が叩きつけられた。

身体が、バラバラになる錯覚を得る。

視界の隅で峰が制服からパラシユートを展開するのが見えた。

嵌められたら、訳ではない。

俺が勝手にでしゃばって、勝手に落ちたのだ。
そして。

このまま落ちれば、死ぬ。

は。

「士」
「士」

口元が歪んだ。

ふざけんな

ふぞけんなふぞせんなんふぞせんなんふぞけんなんふぞせんなんふぞせん
なふぞけんなんふぞせんなんふぞせんなんふぞけんなんふぞせんなんふぞせん
なふぞけんなん――――――！

二の庵が！

握拳裂を殺し、拳士最強を襲名した俺が！

魔弾の姫君 レギの恋人であり従僕であるこの俺か！

「こんなところで死ねるかあ——！」

強引に姿勢を変える。

豆を一足を一向に

両足に淡い蒼の光が宿る。

足の裏が強く輝き、

「おめでとう。」

バ
シ
ン
！

右足の筋肉を
蹴った

蒼い光が弾け
身体が飛行機に近づく

バシン！

せりにまつと距離が近づいていく。

走法　油弾き《せりなまじき》。

空間を弾いて、跳ぶ走法。
空中を走る歩法だ。
那須蒼一の奥の手の一ツ。
無論、そう気安く使える技ではない。
なぜなら、

「ぐ、あこ……！」

両足に激痛が走る。

空間を蹴つて跳躍するとこう無理な動きにて両足の筋肉が断裂していくのだ。

これで、2回。
まだ、届かない。
だから、もう1回。

「つおおおお――！」

バシン！

右足からブチブチという不吉な音が響いた。
それでも、空中を蹴りぬく。

視界の飛行機に開いた穴がすぐ近くに。
あともう少し――！

手を伸ばした。

おもいつきり。

それでも、僅かに届かない。

それでも、手を伸ばした。

なぜなら。

「無事か　兄弟？」

「ああ、悪いな　兄弟」

頼れる親友が俺の手を掴んでくれると信じていたからだ。
最も、この時俺達に浮かんでいた笑みはすぐに消える。

なぜなら　。

なぜならば、いきなり来たミサイルが飛行機の翼のエンジンを破
壊したからだ。

・　・　・　・　・　・　・

空中から這い上がつてから数分後。
俺は一人で飛行機の最下層にいた。
右足を引きずりながら。

左足は何とか無事だった。

言つておくが独断行動ではない。

機内に引き上げられてから、俺もコラクピットにこいつしたがキンジに言われたのだ。

正直、なぜかなんて解らない。
だから、聞いてみる。

「それで、キンジ。俺は何をすればいいんだ?」

『ああ、少し待ってくれ。今考えをまとめてる』

あ、や。

携帯をスピーカーモードにして会話して、聞こえたキンジの声は
実に冷静だ。

『性々働く《ヒステリアス》』様々だ。

『よし、まずは状況を説明する』

「おひ、頼むぜ」

「いいか 現在ミサイルのせいによる燃料漏れのせいであと15分で燃料切れで政府にも見捨てられてどこにも緊急着陸できずにこのままいけばみんな死ぬしアリアを死なせたくないから武蔵高の空き島に着陸するから」

「は、はあー?」

めちゃくちや大事なことを一氣に言いやがった!
しかも、何気にのろけやがった!
いつかの仕返しか!

「それでだ、正直着陸に成功するかどうかわからないからさ

」

「ひとつなんとかしてくれ。

「は

どうかしているぜ。

右手も左手も使えない俺にそんな事頼むなんて。
最も それに応えようとする俺もどうかしている。

「 委細承知」

拳士最強を魅せつけてやる。

・・・・・

さらに数分後。

飛行機は着陸に向けて高度を下げていく。

強いGがかかるが、来るとわかつていれば問題ない。

携帯からは、

『10、9、8、7、6』

『5』

キンジが着陸までのカウントをとっていた。

一つ息を大きく吐く。

『4』

無事な左足を大きく振り上げた。

『3』

左足が蒼く輝く氣を纏う。

『2』

高速で滑る物体を止めるにはどうするか？
進行方向に別の物を置くか。

接してある部分の摩擦係数を大きく上げるか。
色々あるだろ？。

『1』

そして 上から強い力を『える』という方法。

「蒼の一撃第五番」

『0-1』

「『支蒼滅裂』—。」

着陸と同時に振り上げた左足を思い切り振り下ろす！
振り下ろした左足を中心に床に放射線状にひびが入る。
同時に今までとは段違いのGが襲う。

蒼の一撃第五番、『支蒼滅裂』。

いわゆる震脚だ。

否、いわゆらない震脚だ。

振り下しと同時に生み出す衝撃波を相手『える』といつ奥義だ。
本来ならば複数の敵に囲まれた時用の奥義だ。
今、この場合では目的が違つたが。

震脚で狙つたのは上からの力で機体を止めようとしたわけだ。
下方向に強い力のベクトルを『えて』減速させる。
そして、後は。

「止、ま、れえ————！」

叫ぶだけだ。

叫んだ瞬間、

「！？」

横向きのGが強くかかった。

なんだあ！？

そして、小窓から見えた。

飛行機の羽の部分に風力発電の風車の柱に激突するのを…
それによつて機体がグルリと回るよう滑る…！
は、はははは！

まつたく頼りになりすぎるぜ、兄弟！

そして激突の衝撃により機内を転がつて…。
機体が止まつた事を確認して、

「……さすがに限界だ、ぜ」

気を失つた。

第16卷 「支那滅裂」 - by 那須蒼一（後書き）

武偵殺し編は次で終わり。

感想待つてます。

第17拳 「 恋人同士がキスする分には関係ありませんよね? 」 b ソレキ

PV110000越え、ユニーク200000越えました！

ありがとうございます！
ついでに総合評価も1000越え、これからもよろしくお願ひします！

第17拳 「 恋人同士がキスする分には関係ありませんよね? 」 bソレキ

後日談というか 今回のオチ。

まず、何から話すかというと雪つとやはりハイジャック事件についてのことだらう。

乗客には目立った怪我は無し。

空き島に緊急着陸した飛行機は現在解体中だ。

空き島自体は風力発電の風車が一本ひん曲がってるといふ、美観的には非常に残念なことになっている。

そして、犯人について。

結局峰・理子・リュパン・4世は逃亡。

足取りは掴めなかつた。

と言うか、生死すら不明だ。

いくら高度を下げてパラシュートを使つたとしていたとはいえ、丸裸同然で飛行機から飛び降りたのだ。

それでも、間違いなく生きているだらう。

俺もキンジも神崎もそう信じている。

ああいつやつは生き汚いと、相場が決まつている。

それから、遠山キンジと神崎・H・アリアについて。
この二人についての顛末は正直俺はあまりよく知らない。

ただ、結局神崎は日本に残つたことは知つてゐる。

わざわざ俺の所に来て、二人でそう報告してきたからだ。

それを、まるで友人への結婚報告のよつだと思ったことは秘密だ。

そして俺、那須蒼一の話。

ハイジャック事件の2日後、目が覚めて待つていたのは 説教地獄だった。

まず、病院の看護士さんに怒られ、医者に叱られ、救護科のアシピュラスの知りあいからは呆れられた。

右手は傷口が開いてさらに悪化。

右足は一度の宙弾きにより重度の筋肉断裂。

左足は右足よりもましだが、『支蒼滅裂』による負担でやつぱり重度の筋肉断裂だった。

全治3ヶ月。

俺でもつてもう3週間はかかる大怪我である。

不覚 といえば不覚だった。

というよりも 平和ボケしていたのである。

思えば4ヶ月前の戦いを越えて、拳士最強を襲名してから初めての事件だったのだから。

・・・・・

「聞いた話によれば古巣に帰ろうとしたアリアさんを絶叫キンジさんが引き止めて、ロンドンの武僧の方々から逃げるために女子寮の屋上からヒヤツハーダイブかつこBGM宣言つきかつこ閉じるで文字通り逃避行したらしいです」

「ふうん。結局ハッピーハンドってどーが?」

「概ね、そういうことでいいんじゃないでしょうか?」

ハイジャック事件の3日後。

俺は病室でレキに例の2人のことを聞いていた。

俺はベッドで上体を起こし、レキは隣で椅子に座つて。

あいつら、神崎が日本に残ると来ても詳細は言わなかつたからだ。

「蒼一さんは気づいていたんですか?」

「まあな、最も恋人とかそういう関係を望んでいふと思つたんだけど……パートナー、で終わつてるもんなあ」

そう、あの2人はもうしばらくパーティーを組んでいくらしいがあくまでパートナーという関係らしい。

……本人達的には。

「まあ、そこらへんの話は本人達次第にだなあ……」

「それしかないでしょうね」

「ううだなあ。

それ以外にできる」とは、

「面白おかしく弄るしかないか……」

「ナチュラル外道発言はやめましょ」

はいはー。

キンジも身を固める時が来たと思ったんだけどなあ。
しかし、まあ。

これでこの武僧殺しに関する事件はこれで終わりか。
まったくいろいろ大変だつたぜ。

……

「…………」

「…………ん?」

ちょっと待て。

なんか忘れてね?

「…………なあ、レキ?」

「はー?」

「…………」

「無しに決まつてゐでしょ」

「…………」

「無しに決まつてゐでしょ」

「…………」

「無傷で帰つて来たら、とこりう話しでしたよね？ それなのにそんな大怪我をして。無しに決まつてるでしょう？」

「…………はい」

「では、私はこれからくーちゃんに新しいアーリンローを借りる約束があるので失礼します」

「…………はい…………」

そうして、彼女は病室を出て行つた。

「嗚呼…………鬱だ…………」

怒つてるかなあ…………。
失望してるかなあ…………。
がっかりしてるかなあ…………。
と。俺が落ち込んでいたら、

「忘れものをしました」

レキが戻つてきた。
まさか……追い討ち…？
俺が戦慄していたら、

「お帰りなさい。蒼一さん」

ちゅう。

俺の唇とレキの唇が重なった。

！？

それは数秒続き、離れた。

「……レ、レキさん？」優美は無じじゃなかつたんですか？」

「ええ、無しですよ」

ですが、と仄かにはにかんで。
わずかに首を傾げて、

「 恋人同士がキスするの分には関係ありませんよね？」

では、と言つて彼女は出て行つた。

「……………」

……どうしようか。

にやけが、止まらない。

俺は彼女に一生勝てないのではないかと、ふと想つ。
惚れた弱みとは よく言つたものだ。
まさしく、その通り。

とりあえず、急上昇したテンションをじりするか。

……そうだな、うん。

とりあえずキンジと神崎を弄る。

キンジは言うに及ばず、神崎も恋愛事には弱いだろう。

それなら面白いはずた。

それはきっとキンジだけのよりも面白いはずた。

なぜなら 1人よりも2人の方がいいに決まってるんだから。

第17拳

「恋人同士がキスする分には関係ありませんよね?」 b ソレキ

次回!

海人さんとのコラボです!

海人たちとのコラボでーす！

ちなみに時系列気にしてください。

某年某日某曜日 では話が進まないから口曜日。

「えーと、あんたが拳士最強の那須蒼一？」

1人で秋葉原に繰り出していたらそう声をかけられた。黒髪で年は俺と同じくらいで、首に青い水晶のアクリセ。そして、目を引くのは真っ赤な瞳と額の傷。俺と同じ武僧高の制服だが……誰？

見覚えは、ない。

そいつは、いきなり。

本当にいきなりを

「…………ひょっくら俺と勝負しようぜ？」

「…………はあ？」

・・・・・・・・・・

所変わつて、武偵高のグラウンド。
日曜日だから、人気はない。
いるのは2人。

俺、『拳士最強』那須蒼一。
その俺の正面にいるのは先程の少年。
腰に日本刀。
名前は……まだ聞いてなかつた。

「そういうや、お前名前は？」

「東城一真つてんだ、よろしくなー！」

テンション高え……。

思いながらも一応構える。

虚刀流、一の構え『鈴蘭』。

……いや、なんで戦う事にしてるんだ?
そう思つ間に東城は、

「靈刀、『鬼切』！」

鞘から漆黒の刀を抜刀する。

「なん……だと……」

真っ黒い刀……。

「か、か」

「か？」

かつけえなあ、おい。

漫画ではよくあるが実際にはなかなか見れない。
少なくとも、俺は見たの初めてだ。

「……いや、なんでもねえよ。わざわざ始めよがぜへ。」

心を落ち着ける。

少年心といひ名の心を。

「なんだよ、いきなりやる気だなー。」

お前に言われたくない。

やれやれ。

そして、

「『拳士最強』那須蒼一」

「『千本の刀』^{サウザンドソード}東城一真」

「や、尋常」……。

「勝負……。」

・・・・・・・・・

まずは小手調べレベルで攻撃を繰り出す。
拳を、貫手を、掌低をぶちまける。
それなりに、力を込めているが、

「当たんねえな！」

東城の言つとおり当たらない。
見切られ、刀で凌がれる。
小手調べと言つても当たればそれだけで戦闘不能になるはずなん
だがなあ。

ならば、

「虚刀流、『石榴』から『菖蒲』まで打撃技混成接続！」

打撃技による連続技。
たが、それすらも、

「おおつとーー？」

よけられ、耐えられる。
あまつさえ、

「そんなもんかよーー？」

反撃の突きが来た。
体重が乗せられた一突き。
そしてそれを 待っていた。
突き込まれる一刀を前に俺は東城に対して、左半身。
黒刀は俺の背中を皮一枚外して通過する。
そして、

「虚刀流、『菊』ーー！」

左の一の腕と右の肘を使って背骨を支点にし。
俺は黒刀をがっちりと固定した。

「な……ーー？」

「こ……ーー？」

驚きの声は2つ分。

己の突きを避けられ、固定された東城。刀折り『・・・』の技を使つたにもかかわらず、折ることをできなかつた俺。

さらに、そんな俺に目を丸くする東城。

動いたのは 同時だつた。

俺は固定するのに使つていた右肘をそのまま手刀として繰り出す。それでも、やはり東城は刀で受ける。続けざまに足刀や手刀を繰り出しが、それらも受けられる。打ち出した拳や足が30を越えたところで、一旦距離をとる。固い、な。

防御がではなく刀そのものが。

虚刀流『菊』は梃子の原理で刀をへし折る技なんだけど、折れなかつた。

それはつまり、あの黒刀がかの刀剣最堅に匹敵する硬さを誇るわけではないはずだ。

俺の虚刀流はあくまでも真似だ。

見真似であり、

読真似なのだ。
だから、あの黒刀が絶対に折れない刀といわけではない、はずだ。

……ないといいなあ。

「さすがは拳士最強、鬼切が折れるかと思ったぜ！」

「折れてないけどな」

それにして、『コイツテンション高い。

戦闘狂か？

まあ、それはともかく。

わかつたのは 僕程度の虚刀流の強度では足りないといつこと

だ。

「コイツを。

このテンション高めの『千本の刀』《サウザンドソード》東城一真
を打倒するには。

それは。

それは

「おもしれえ」

初めて、俺の顔に笑みが浮かんだ。

それに東城が気づいた瞬間 動いた。

とんつ、という足音を残し。

東城の目と鼻の先へ。

俺はその東城の首もとに右手を添える。

攻撃ではなく、ただ触れただけだから反応できなかつたんだろう。

それをそのまま、

「！？」

首根っこを掴んで地面に叩きつけた。
そのまま 引き摺る。

「ひ、ひおおおおおおおお！」

20メートルくらい引き摺って。
跳んだ。

「蒼の一撃、第十一番」

東城の首を

「『蒼和雷同』！」

投げて、思い切り地面に叩きつける！

「！」

東城は地面に落ち、土煙が舞う。

蒼の一撃、第十一番『蒼和雷同』。

相手の首根っこを掴んで、地面を引き摺って跳んで、さらに投げ飛ばして地面に叩きつける奥義。

蒼の一撃シリーズにおいて、唯一の投げ技。
かなり、えげつない。

まあ、でも、

「これで終わ……」

り、という最後の言葉は言えなかつた。

いや、別に俺が“り”と発音の仕方を知らなかつたわけではない。

言えなかつたのだ。

“り”を言つ直前に、

「鎌鼬、風斬！」

といつ飛びと共に風の刃が土煙の中から飛来したからだ。

「へ、ひおひー。」

俺はそれを情けないこと、
恥ずかしいこと、
思い切り地面に倒れることで避ける。
そこで俺は気づいた。
さつき、終わるとか言おうとしたのは、

「フラグだったか……！」

「なにがだよ」

土煙から現れた東城は無傷だった。
いや正確にいえば、地面に引き摺った分の擦り傷や汚れ、頭から
少し血を流しているがそれだけだ。
最後の決めの叩きつけの分の傷　　はない。

「どうこいつ」とだ……？』

そして、気づく。

東城の握っている刀がそれまでの黒刀から刀身の薄い緑色の刀に
変わっているのを。

さらには風を全身に纏っているのを。

「そいつは

「フツ！ そうだぜ、コイツは風を操る刀『鎌鼬』。今のは『旋風』
つて技だ！」

なんだ、それ。

「うりやましー。」

「よつし、那須！ 次で終わらせようぜー！」

そう言つて、東城は鎌鼬を振りかぶる。

そして、刀に風が集まっていくのが分かる。

必殺技だろ？

ならば、それには 応えるべきだろ？

俺は右腕を大きく振りかぶる。

手は平手だ。

「いいぜ、たしあ前は俺に負けて超落ちこぼれになるけどなあー！」

「なんだ、それ！」

決めセリフだよ。

深く突っ込むな。

そうして、目が合つた瞬間、

「『螺旋丸』ー！」

「『天馬蒼空』ー！」

2人の中心で風がぶつかり合つた。

・・・・・

後日談というか、その後にあった事。

結局、その後3時間くらい戦い続けて、グランドを六だらけにした。

その後2人揃つて蘭豹に説教されたが。

それでも、別れ際に拳をぶつけ合いながら、互いの名前を呼び合つた事を明らかにしておくべきだね。

さらにその後に本田秋葉原に繰り出したのはレキに新発売のCDを取りに頼まっていたのを思い出し、行つてなくとものすこく焦つて顔を青ざめたのは
……………どうじょうか。

こんな感じでしたが、どうでしょうか？

海人さんへ。

加筆修正したので何かあつたらよろしくお願いします！

次回から魔剣編

プロローグ「蒼一！ 子供の作り方を教えなさい！」 by 神崎・ホームズ・アリ

魔劍編始まり始まり

プロローグ「蒼一！ 子供の作り方を教えなさい！」 by 神崎・ホームズ・アリ

「蒼一！ 子供の作り方を教えなさい！」

「ハイターイムターミム、5分たつたらまた入つてこい」

神崎・H・アリアは病室に来襲してとんでもないことを言つた。
とりあえず部屋から追いだした。

「さて」

まずは携帯の電話帳からキンジのアドレスを出して、発信。
数「ール置いて、

『蒼一か？ どうし』

「死ねロツコン」

電話を切つた。

.....。

さて、どうするか。

とりあえずは現状把握。

武偵殺しの事件から数日後。

未だに俺は入院中だ。と言つても傷はそれなりに回復した。

日常生活にはさほど問題ないくらいに。

あと何日かで退院する予定だ。

今は病室に俺1人。

レキはまだ学校だ。

病室の外には神崎が。

つまり。

つまり 今この状況を俺一人で乗り越えなればならない。

「ふむ　いいだろ？」

遊んでふざけていじって弄んで楽しんでやんよ。

「入つていいぜ、神崎」

神崎、再登場。

彼女が何か言う前に、

「悪いが、俺はソレを教えるわけにはいかない」

「……なんですよ」

「いいか？　そういうことはキンジに教えてもらひや」

「そのキンジが教えてくれなかつたから、ここに来てるのよ」

「どうな。

そんなことだらうと思つた。

「ああ、だから教えてもらう方法を教えてやる？」

「……？」

神崎が首を傾げる。

「いいか？」

一度区切つて、

「キンジの前で制服の胸元緩めて女の子座りして目を潤ませながら上目遣いで“教えて……キンジ……？”とでもいえば奇声を発しながら教えてくれるぜ」

۷

神崎は言われたことを理解できなかつたようで、少し怪訝そうに首を傾げ、

「……！ な、なに言つてゐるのよー。」この変態！ 風穴開けるわよ

「落ち着け、いいか。これは変態的なことじやない
むしろ神聖なことだ」

- びこかよ！

「わからないか？ 子供ができることは神聖なことで嬉しいことだ。ならばそのための手段を問つ」ともまた 神聖なことだ」

「は、
はあ
？」

「そうすくなわち生命の神秘！」
だから神崎、
氣合いを入れて聞いて
來い」

「いいのかしら？」

「いいんだよ。お前シャーロック・ホームズの子孫なんだろ？ そのお前がそんな誰でも知っていることを知らないといいのか？」

「……！ い、いい訳ないでしょ、うー。」

“誰でも”の部分に過剰に反応した。

……ちゅうりいな。

「あたしは神崎・ホームズ・アリア・よ！ その名にかけて聞いた来るわよー。今すぐー。」

単純だ……。

というより簡単だ。

やつぱりちゅうりい。

大丈夫かホームズ家？

神崎は脚を踏み鳴らしながらドアに手をかけて、病室に出て前に。

「ああ、蒼一。いいかげんあたしのことアリアって呼びなさいよ。よそよそしいわね」

「……考えておくよ」

出ていった。

なんか、変なんとこりでカツコイイヤツだな。
まあ、それはともかく。

「ぐ。どうなるか楽しみだなあ」

「なにがですか？」

ମୁଦ୍ରଣ - ?

一
ノ
リ
ハ
ニ
シ
テ
シ
ル

いつの間に。

「レ、レキ？ いつ来たんだ？」

「今です。アリアさんとすれ違いましたがなにかあつたんですか?」

「あ、ああ。ちよつと質問されてな……」

「哪儿ですか」というので見て欲しいことがあるのですが」「ん、なんだ?」

レキは制服の胸元を緩め。床に女の子座りした。
目を潤ませながら上目遣いで、

「教えて、ください……蒼一さん」

「ちえつおー！」

6

奇声を上げてしまつた。

プロローグ「蒼一！ 子供の作り方を教えない！」 by 神崎・ホームズ・アリ

必殺、章替え！
続きません。

緋弾のアリア11巻の表紙を見て決めた！

番外編で嫁理子やるぜ！
そのうちだけど！

感想待つてまーす。

第1拳「俺のベッドなら2人で寝れるぜ」 b y 那須蒼一

「それでキンちゃんに付く悪い虫を殺すにはどうしたらいいと思つ？」

「アドバイスの前に言つておくが、殺すな」

昼休み。

久しぶりに学校に復帰してとんでもないことをスゴい笑顔で聞かれた。

相手は星伽・白雪。横にはレキが。

教室にて3人で星伽が作つてきた重箱弁当を揃んでいる。うまい。

星伽から持ちかけられたら相談は、キンジに付く悪い虫＝神崎をどうするかといふモノだった。
ちなみに相談料はこの弁当。

「い、いやだなあ、那須くん。言葉の綾だよ、あや。ほら、私つて綾取りもできるし」

そんな設定は知らない。

「ていうか、綾取りでも人殺せますよね」

「レキ、そこに触れたらダメだ」

おほん。

「よし、星伽。キンジにつく悪い虫の取り除き方だったな」

「うるー。」

だから、その怖い笑顔を止める。
背筋が、凍る。

「ふむ」

顎に手を当てて考える。
つまり神崎をどうやってキンジから遠ざかせるか、とこつことした。
……ふむ。

「無理じゃね?」

「……?」

「いや、何でもない」

びひじよいか。

正直言つて神崎をキンジから遠ざかせるのは無理だ。
無理ゲーだ。

隣のレキを見る。

神崎の唯一の友達といえる彼女ならば、なんとか

「……」

「一。」

「、コイツー。」

田を開じて音楽に集中してやがる。・

いや、よく考えれば友達がいない神崎をレキが売るとも思えないか。

星伽とも最近仲がいいようだから不干涉を貫くのか。
ぬ、ぬぬぬぬ。
どうするべきか。

少なくともこの皿飯分は何か案を出さなければ。

うーん。

うーん。
うー、あ。

「逆に考えて見よつぜ星伽

「逆……？」

「そう、逆だ。キンジから悪い虫を取り除くんじゃなくて、お前が
キンジを引きつけるんだ」

「……」

バーンと星伽の頭に衝撃が走った……よつて見える。

「神崎の行動を防ぐのは至難だ、だからー。お前が！ キンジを引
きつけ 否、惹きつけるんだー！」

「な、なるほどー。」

そうだな、具体的には……うん。
これだ。

兼ねてからの俺自身の野望の為にも。

「星伽、じうにかしてキンジの部屋に転がつ」め。俺は気がしないから

「え、えええーー?」

ペーン、と星伽の頭に戦慄が走つた……気がする。

「キ、キンちゃんと24時間一緒に棲むーー?」

「もうだ、同棲だ」

「ああ、24時間一緒に緒ーー?」

「キ、キキキキキ

「キ?」

「キヤ—————!」

あ、鼻血吹いてぶつ倒れた。
机を回り込んで見てみれば、

「えへ、えへ、えへへへへ

「怖い」

といふが、キモい。

大和撫子が売りの星伽がするような顔じゃない。とりあえず。

「おーい、だれか保健室に運んでくれ

クラスの保健係に星伽を任せてくれ。

俺は、

「さて、飯飯」

星伽のことはともかく、飯に集中しようと。箸を伸ばして 力チャリ。

……力チャリ?

「蒼一さん」

見れば。

横を見れば。

レキがライフルを俺の頭に突きつけていた。

……おこおい。

「蒼一さん、今の話はどういうことですか?」

「ど、どうこうひと、とせ……?」

聞きだいのはこいつだ。

「星伽さんとキンジさんの同棲をすすめるとせうこいつもつですか?」

「いや俺はただ親友の恋路を思つてだな

「そんなことはどうでもいいです」

い、言い切つた！

「半年前はあれだけ同棲はダメとか言つていた人の案とは思えませんね」

い、いつの話を……。
でもまあ、つまり。
これは所謂 嫉妬か。
やきもち。
かわいいなあ。

「まあ、まで。だからさ」

「だから？ 頭を打ち抜いてください、です……」

「お前もウチに来いよ」

「！」

レキの琥珀の目が、見開かれる。

「あの部屋にお前一人で置いておくのはどうかと思つしなあ

レキの部屋。
置いてあるのは、栄養食品、漫画、ラノベ、DVD、弾薬のみだ。
不健康すぎる。

「……いいんですか？」

レキの瞳が僅かに揺れる。

「心

」
「では

間は短かった。

じいらを見つめて、頭を下げて、

「不束者ですが、よろしくお願ひします」

「 応

言葉と共にライフルが下りる。
ふう。

胸をなで下ろす。

「着替えとかはともかく、寝床はどうしましよう。白雲さん来て
すよね？」

「ああ、それなら問題ない

なぜなら。

「俺のベッドなら2人で寝れるぜ」

そうじゃねえだろ！、とこうしつゝが周囲から入った。

第1拳「俺のベッドなら2人で寝れるぜ」 b y 那須蒼一（後書き）

とつあえず、白雪に乗つかつて嫁レキも同棲。
まあこの時点では白雪がキンジと同棲するかは決まってないんですけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5134y/>

緋弾のアリア 落ちこぼれの最強拳士と魔弾の姫君

2011年12月27日19時51分発行